

Jingle All The Way To Triumph

TAC/108

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

クリスマスを目前に控え、祭りの雰囲気漂うカルデアに叩きつけられた一枚の挑戦状。

『サンタクローズなどいない』と主張する書状の主に立ち向かうは、ナポレオンとジャンヌ・リリイ。

カルデアより拉致されてきた『三人の王』と書状の主が待つ四重の石塔へ、一行は足を踏み入れる。

そこで彼らが目撃する真実とは――！

『変異特異点 A・D・1844 永劫回帰石塔 エイヴィヒカイ  
ト』開幕。

## 目次

序章：王たちの予感	1
第一層：王様がサンタクロース その1	5
第一層：王様がサンタクロース その2	8
第二層：Last Lonely Christmas その1	13
第二層：Last Lonely Christmas その2	17
第三層：復讐は誰のために	23
最上層：超人のキャロル	27
あわてんぼうの皇帝陛下	32
再走・第一層：アルテラサンタがやってくる	40
再走・第二層：Fairytale of Gilgamesh の1	48
再走・第二層：Fairytale of Gilgamesh の2	54
再走・第三層：怒れる王モンテ・クリスト	60
再走・最上層：暗夜の果てに	70
聖夜の星、曙光の夢	77
エピローグ：1844年クリスマスの旅	101

## 序章：王たちの予感

「ようマスター、楽しんでるかい？」

冬の寒さが深まる頃の話だ。と言つても、この場所は年中豪雪に見舞われているので季節感などあったものではないが。

南極の山嶺に存在する、人理継続保障機関フィニス・カルデアの施設は、何度目かのクリスマスシーズンを迎えていた。

所属するサーヴァントやスタッフ達は、日々の労苦を労つたり、あ  
る者は稚氣じみてクリスマスマスの贈り物に思いを馳せていた。

カルデアに所属する唯一のマスター、藤丸立香もそうだ。彼女は近日に控えたクリスマスパーティーに備え、施設内の飾り付けを手伝っていた。

その日の準備を終え、窓辺に座りながら疲れた体をほぐしていた時、彼女の傍らに現れたのは、軍服を着崩した屈強な大男だった。高級な銘柄の葉巻を吹かしながら、男は話しかけてきた。

「まあ、大変だけど楽しいよ」

「そうか、そりや良かった。冬は冷える。オレもロシアでそれを痛感させられたが、まあそれはそれとしてクリスマスは楽しいモンだ。オマエは特に楽しめ。未来ある若者であるからにはそうあるべきだろ？」

「ありがと、皇帝陛下」

「良いつてコトよー」

皇帝陛下。この男は立香から冗談めかしてそう呼ばれることがある。

弓兵のサーヴァント、ナポレオン・ボナパルト。

初代フランス皇帝であり、数々の遠征によりフランスに栄華を齎した凱旋の王。人々に願われ、伝説を成し遂げた偉大なる皇帝。砲兵としての経験からか、彼は勝利砲という巨大な砲台を扱うアーチャーとして召喚されている。

二人は他愛の無い話に花を咲かせた。いつぞに食堂で誰が大ポカ

をやらかしたとか、夏の夜に特異点で見た星空が綺麗だったという程度の話だ。だがその何でもない平和こそ、立香にとつては何よりも尊いものだった。

……ところが。

「トナカイさん！ 大変です!!」

平穏を打ち破る、騒々しき白い影が舞い込んだ。

「リリイちゃん、どうしたの?」

「オーララ! あの聖女サマ……の別側面の、幼少時代、で良いんだよな? 名前は確か……」

「あ、初めまして、ナポレオンさん。私はジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリイです。呼びにくければ『オルタ』でも『リリイ』でも構いませんよ?」

白い髪、金の瞳、そしてクリスマスに相応しく赤と緑で彩られた服装。可愛らしい少女の姿をした彼女もまた、カルデア所属のサーヴァントだ。

クラスはランサー槍兵、名はジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリイ。ちなみにこれでも本人の言うところによれば略称であり、正式名称は更に長い。英霊ジャンヌ・ダルクから生み出された別側面、アヴェンジャラー復讐者・ジャンヌ・ダルク・オルタナティブの幼少時代……という可能性が紡がれて生まれた奇跡のサーヴァントだ。猪突猛進気味な性分のために、年中サンタ役として忙しくカルデア内を走り回っているが、今日は特に騒がしい。

さて、何やら大慌てのジャンヌ・リリイは、懐から書状を取り出し、その内容を立香に見せる。ところが立香には読めない。文字は非常に美しく達筆であり、著者の教養の深さを感じさせる優雅な書体だ。だがそれは見慣れぬアルファベットの列であり、おそらくはドイツ語かフランス語であるらしかった。カルデアに来るまではごく普通の学生だった立香には読めない。代わりにナポレオンが手に取る。しばし唸った後、ナポレオンは内容を告げた。

「簡潔に述べるとだな……サンタクロースなんざいねえ、それを証明するために挑戦を申し込む。以下の座標にて『三人の王』と共に待つ

……だそうだ」

「サンタがいない!? 言語道断ですわね!」

リリイが怒りと共に地団駄を踏む。サンタの非存在とは即ちリリイの存在の否定である。こうも言われては退けない。

「ああ、厄介な事態が起きる予感しかしねえ。急ぐぞマスター、嬢ちゃん! クリスマスの邪魔はさせねえ!」

「わかった! 急ぐよ、リリイ!」

かくして三人は管制室に向かう。目標は一八四四年、ドイツ・ライプツィヒ郊外のある村であった。



石造りの古風な四重塔が、静かな村の一角に佇んでいる。雪に晒され続けて白く染まったその塔の第三層に、二人の男がいた。

一人は塔の主らしき男。もう一人はポークパイハットを被り、黒いマントを羽織った色白の男である。

「何の真似だ、コレは。あの二人の様に呪縛するでもなく、オレのみをこうして放し飼いにするなど」と

「どのみち、脱獄の逸話のある君であってもここからは抜け出せないし、また私の言葉も、君には届かない。むしろ君のような人間は、私の弱点とも言える存在だ。だからこそ乗り越える意味も生じるといふものだよ」

塔の主は、色白の男に楽しげに語った。それが面白くなかったのか、色白の男は憮然とした態度で塔の主を見据えた。

「私はただ、知りたいのだ。存在の意義というものを。サンタクロースはその材料だよ。非存在と実在の境界線にあるモノ。私はそこに何か意味を見出したいのだ」

「ふん、勝手にしろ。せいぜい食い破られぬよう気をつけておけ。たとえこの無限獄であろうと、オレが抜け出さぬ保証は無いと知れ」

「それはそれで、むしろ期待しているとも」

塔の主はそう言って、最上層へと去っていった。

色白の男は、カルデアから連れて来られた『三人の王』の一人だ。彼はこの明かりもロクに存在しない塔の第三層に一人閉じ込められた。

この塔からの脱出は現状不可能であった。そのため彼は一人、カルデアのマスター・藤丸立香の救援を待たざるを得なくなったのだ。

「……いつぞやを思い出すな。かの監獄島に比べれば随分とマシだが

……気をつける藤丸立香。お前はこの塔に囚われてくれるなよ」

冷え切った空気を、男の言葉が震わせる。

藤丸立香一行が向かうは、精神を時間から切り離す不壊の無限獄。

西暦一八四四年、ライプツィヒ郊外にそびえ立つ石塔である。

クリスマスまで、あと五日。

## 第一層：王様がサンタクロース その1

立香<sup>りっか</sup>達が降り立ったのは、雪の深い村の一角に聳え立つ白い石塔の入り口であった。辺りに人の気配は無い。家屋は並んでいるところを見るに、通常の空間ではなく、結界の内部に造られた世界という風情である。

「手紙の主は、この空間を造って何をしようとしているんでしょうかね?」

「さてな。ま、とりあえず中に入ろうじゃねえか」

ジャンヌ・リリイへの返答を保留し、先行してナポレオンが入っていく。その勇壮たる足取りは流石に王者の風格と言うべきか。

立香もジャンヌ・リリイと一緒に入った。

独りでに石造りの扉が閉まる。立香の視界は完全に闇に閉ざされた。サーヴァントであれば夜目も効くが、普通の人間である立香はそうもいかない。

「閉じ込められた?」

「そうだろうな……さて、三人の王つてのはどんなヤツなのやら……うおッ!」

「きやつ!」

突如視界が明ける。いきなりの明転に三人は目を瞬かせた。そしてこの石塔の第一層の全貌に、三人はその目を見開くことになった。

室内は円形のドーム状であり、その内装はいかにもクリスマスといった風に、赤と緑の色彩で煌びやかに飾られている。中心には巨大なクリスマスツリーがあり、その頂点には、毛皮の塊のような羊めいた動物の上に跨る、露出度の高い衣装を着た少女を象った金色のアクセサリーが飾られている。

「あれは……アルテラサンタ!」

「私の後輩ですね!」

「いやしかし、本人の姿が見えんぞ。どうなってる?」

「私はここだ。ここにいます!」

三人の誰でもない声が空から響く。



次の瞬間、虹色の光と共に、第一の王が降り立った。

羊のようなナニカに跨った、赤い衣装の少女。巨大クリスマスツリーの頂点に座するアクセサリーと、色以外は瓜二つの外見。

彼女の名は、弓兵<sup>アーチャー</sup>・アルテラ・ザ・サン「タ」。

通称アルテラサンタ。かつてファン族の王アツテイラとして地上に在った彼女は、二〇一七年のクリスマスにてサンタクロースへと変貌を遂げた。とある古き神性の力を借りた彼女は、立香と共に冥界に赴き、その年の暮れに発生した異常を阻止したのである。

そのアルテラサンタが、この異常における第一の関門に現れたのだ。

驚きながらも立香はアルテラサンタに事情を問う。

「どうしてここに？」

「この主に依頼された。残り二人も似たような経緯でここにいる。ちなみにここを出ることは出来ない。そういう仕掛けになっている。残念だが私は今年のサンタクロースの役割は果たせそうにない」

「そんな……！」

リリイが悲しげにアルテラサンタを見つめる。リリイにとってアルテラサンタはサンタクロースとしての後輩だ。カルデアの三代目サンタクロースにあたるアルテラサンタは、リリイにとっても大切な仲間である。

「事情は粗方把握した。ひとまずは、ここを通してもらえないか？ オレ達に争い合う理由はない。この異常が大事になる前に、阻止しなけりゃならんのだが……」

ナポレオンが尋ねる。ナポレオンの正面には巨大なクリスマスツリーがあるが、その裏にある扉に彼は気づいていた。恐らくあの扉から次の層へ行けるのであろうとナポレオンは睨む。

アルテラサンタは渋い顔をして首を横に振る。

「すまないが、それは出来ない。この塔の主人との契約でそうなっている。そしてそれは他二人も同様だ……と思う」

「じゃあどうすれば……」

立香が呟いた瞬間、景色が一変する。

そこには巨大なクリスマスツリーも、部屋を飾る多種多様のアクセサリーも無い。新たに現れたのは、満点の星が光る夜空と、雪に覆われた白い大地だった。

「これは……固有結界!? いや、この塔の効果か……」

「私を倒して行け。恐らくそうすればこの塔の上に行けるはずだ」

アルテラサンタは七色の杖を構える。相対するはカルデア一行。

「マスタートル、どうやらマジらしいが……」

「貫き、砕いて、押し通る……だよな?」

「ほどほどにお願いしますよ!?!」

ジャンヌ・リリイとナポレオンは立香の前に立ち、それぞれの得物を構えた。

つづく

## 第一層：王様がサンタクロース その2

「準備はいいな、マスター！」

「いいよ、でもほどほどにね！」

「了解！」

満点の星の下、白銀の大地で向き合うは藤丸立香率いるカルデア一行と、石塔に閉じ込められし『第一の王』アルテラ・ザ・サン〔タ〕。先手を取らんとナポレオンが武器を抜く。それは鉄塊じみた武骨で巨大な砲台であった。およそ常人が持てるサイズではない。

人呼んで『勝利砲』。ナポレオンがアーチャーのクラスで召喚されたのは、彼が生前に砲兵であったことに由来するが、この砲はそれが彼なりに誇<sup>カリカチユア</sup>張された形となる。

「ぜえりやツ!!」

轟音と共に巨砲から砲弾が放たれる。紛うことなき先制攻撃。だが、これを避けられないアルテラサンタではない。

羊と共に空中に飛び上がる。弾丸は空を切り、アルテラサンタの後方で爆発を起こした。

「まあそう上手くはいかないよなア……リリイ！」

「お任せ下さいッ！」

アルテラサンタが上を見遣ると、槍を構えて飛びかかるジャンヌ・リリイの姿があった。

一直線に向かつてくるリリイを、虹色に輝く杖で迎え撃つ。

空中で何度も二人は打ち合う。両者互いに譲らぬ激しい攻防戦を展開した。

「私は先輩ですからね……カッコ悪いところは見せられません！」

「私も、サンタの後輩として負けてはいられないな」

アルテラサンタはリリイから飛び離れると、虹色の杖から鞭の様にしなる虹の刃を飛び出させ、リリイを拘束した。刃と言っても、サーヴァント・アルテラの本来の宝具『軍神の剣』<sup>フォトン・レイ</sup>のクリスマス仕様……またの名をキャンディケインである。殺傷力はやや控えめだ。アルテラサンタは白い羊、ツエルコの上に立つと、キャンディケインを両

手持ちにして大回転を始めた。

「なんてバランス感覚だ、ありやあ!？」

いくらツエルコが安定しているとはいえ、その上で鮮やかなジャイアント・スイングを決めているのだ。正気の沙汰とは言えない。

「そおれ、ぐるぐるぐるぐるー」

「わわわっ、目が回りますー!？」

「マズいな……マスター、一つ頼みがあるんだが聞いてくれるか？」

ナポレオンが立香にある『秘策』を耳打ちした。

立香は一瞬躊躇ったが、その策は状況の打開策としては悪くない。

……それが立香に出来るかどうかは微妙なラインではあるが。

「大丈夫なの!？」

「安心しな、死にはしない。いいか、オレが合図をする。そうしたら全速力で突っ走れ！」

立香は頷くと、ナポレオンが指定した位置に向かった。

「ぐるぐるぐるー」

「あうう……世界が回って……」

ナポレオンは勝利砲を構える。狙うはアルテラサンタ……ではなく、彼女のキャンディケインから伸びる刃である。

「コイツで……どうだ！」

先程よりやや小さめの弾丸が飛ぶ。弾丸は大回転する虹の刃に過たず命中した。

「あ」

「はえ?」

アルテラサンタは大きく態勢を崩し、キャンディケインを手放してしまった。

「わあああああー……」

しかし虹の鞭はリリイに巻きついたままだ。スイングの勢いがある程度殺されているとはいえ、空中で身動きの取れないリリイは重力に従って落下していく。

「しまった!」

「届けえええッ!!!」

大音声を張り上げて、落下するジャンヌ・リリイに飛びついた者がいた。誰であろう藤丸立香である。

ジャンヌ・リリイと諸共に雪の大地を転がっていく立香。それを驚きの視線で見つめていたアルテラサンタを、ナポレオンの砲口が狙う。

「すまん、大王さま。少し眠ってもらうぜ」

轟音、そして着弾。第一の王は黒煙を上げて墜落していく。



「ん、うう……ここは……」

「あ、起き——痛ったあ!」

ジャンヌ・リリイが目を覚ましたのは、星空の下ではなく、煌びやかに飾り付けられた部屋の中であった。

彼女は飛び起き、状況を確認する。頭頂部に奇妙な衝撃を受けたつ、回りを見渡した。

クリスマスツリーの頂点に突き刺さったアルテラサンタ。ツリーの下で葉巻を吹かしているナポレオン。そして彼女のすぐ近くには、何やら痛そうに鼻を押さえる立香がいる。

「いたた……」

リリイが起き上がった瞬間、彼女の頭が立香の鼻にぶつかったのだ。

「——はわわ! トナカイ<sup>マ</sup>さん、大丈夫ですか!」

「うん、大丈夫……」

その様子に気づいたナポレオンが、遠くからリリイに声をかけた。

「目は覚めたか?」

「はい、もうバッチリです! それで……私達、勝ったんでしょうか?」

「おう。アルテラを撃ち落としたり、この空間が元に戻ったのさ。それにしても妙な結果だったぜ。この塔のご主人さまが、あの空間を作ってたのか……?」

「まあ、ひとまずは勝ったということ。次の階に進もう!」

堂々巡りの推論を打ち切るように立香が言う。

足並みを整え、三人は次の階へ向かう。

誰もいなくなつた部屋の中、アルテラサンタは何かに取り憑かれたように呟いた。

「気をつけよ……二人とも気をつけるのだ……ここを切り抜ける方法は一つだけだ……塔の主を……」

その警告は、果たして彼らに届くであろうか。



扉の先は、螺旋階段となつていた。明かり一つ無い回廊を、一直線に進んでいく。

「暗いですねえ」

「さては内装をケチつたな？ 冬は冷え込むツてのに……お前さんは大丈夫か、マスター？ サークヴァントになつて、寝ずに働けたりメシが要らなくなつたのはある意味利点だろうが、お前は人間だからな。何かあれば言え。善処はしよう」

「いや、特に寒かつたりはしないよ。多分、この塔の効果なのかも……」

立香がこの塔に入ってから……いや、入る前から何か違和感を感じていたことがあつた。それは、『寒さを全く感じない』ことである。

思えば、この世界は色々とおかしな点がある。

なぜカルデアにいたはずのサーヴァントがこちら側に連れて来られたのか。

なぜ塔の外に人の気配が無かつたのか。

なぜ雪が降っているのに、サーヴァントはおろか、ただの人間である立香ですら寒さを感じていないのか。

そんなことを考えながら進んでいくと、闇の中に扉を発見した。暗い場所に目が慣れてきた証拠である。

「ここに、第二の王がいるってワケだな」

先頭にいたナポレオンが、その扉を開けた瞬間――

三人は目を焼かれるような感覚に陥つた。

二つ目の部屋は、王宮が如き豪華な部屋であつた。

赤、青、緑、紫……数々の色の輝きを惜しげなく散りばめたような

色彩の暴力。それら全ては宝石によつて織り成されていた。

天井には巨大なシャンデリアがいくつも吊り下げられている。

壁や床は古代ギリシヤの神殿を思わせる作りだが、それら全てがメツキでも塗つたように黄金の輝きを放っている。

だがそれらの中で尚異彩を放つものがある。部屋の中央の玉座……そしてそこに座する、黄金の鎧を着た男だ。

全てを射抜くような赤い瞳、逆立つた金髪、儼然とした表情。

「そんな!？」

「あれが、第二の王……」

「ウソだろ……英雄王だとツ!？」

「遅いわ、雑種共! 我をここまで待たせたのだ、対価は払って貰うぞ?」

玉座に座る男……英雄王が怒りと共に声を張り上げる。

その男に誰もが驚いた。

彼こそは英雄王、即ち『英雄たちの王』。

世界を見据え、全てを見通す裁定者。

世界最古の英雄とも言われる、神々の時代を生きた王。

彼こそは……弓兵<sup>アーチャー</sup>・ギルガメツシュである。

つづく

第二層：Last Lonely Christma  
s その1

「遅いわ、雑種共！ 我をここまで待たせたのだ、対価は払って貰うぞ？」

英雄王・ギルガメツシュは慔然と言い放つ。

相変わらずの上から目線ではあるが、ここまで来れば恒例行事の感すらある。

「待たせたな、英雄王！ 時間は取らせん、手早く移るとしようぜ」

ナポレオンは既に臨戦態勢だ。アルテラサンタとの交戦で、塔を登る際のルールを掴んだらしい。

だがギルガメツシュの方は何か妙にそわそわしている。平時からは考えられないような微妙な表情だ。

「——ふむ、まあ……そうよな……」

いや、様子がおかしい。立香は英雄王の表情に既視感を感じていた。アレに良く似た表情を知っている。しかし喉まで出かかったその記憶は、ナポレオンの質問に掻き消された。

「何か気にかかることがあるのか、英雄王ともあろう者が？」

ナポレオンが問い質すと、ギルガメツシュは今まで一度も見せたことのないような微妙な笑顔を作り、何事か語り出した。

消え入るような声で語られる内容からは無念さが滲み出ており、それはナポレオンに対する返答というよりは自分に言い聞かせるような声色だった。

「……いや、良い。良いのだ。我とて分別はある。たとえ二〇一五年のクリスマスが、無為の時間を一人で過ごす代物だったとしても。次、また次があると思えばこそ我もまたクリスマスを待ち遠しく思えたのであろうに。いや、ならぬ。シドウリからも苦言を呈されたな。『貴方は城壁持つウルクの王なのですから、せめて未来ある子供に対して格好がつくように大人として分別を持ってください』と……だがまあ……辛いものは辛いな……」



声の主以外の誰もが、啞然とした。

立香はあんぐりと口を開け、ナポレオンは何か見てはいけないうるものを見たような表情になり、ジャンヌ・リリイに至っては余所見をして妙に拙い口笛を吹き始める始末。

当然である。

あの英雄王が、まるで間違ったクリスマスプレゼントを貰った子供のように、ブツブツと理屈を一人並べ立てているのだ。

自分は分別ある大人だから悔しくない。間違ったプレゼントが来ても辛くはない。

肩を落としてギルガメッシュが一人呟き続けている内容は、あまりに物悲しい内容だった。

立香は瞬間的に理解する。英雄王が浮かべた微妙な表情の正体を。

それは……いわゆる『コレジャナイ現象』だったのだ。

一般家庭において、その現象は稀に発生する。

誕生日、クリスマス、就学祝い、はたまた平時のお使い……様々な状況で見られる『頼んだモノと異なる物品を贈られる』現象。

特に高額な費用をかけた商品であれば、相手の善意を慮って中々無碍に出来ないものだ。理由が何であれ、コレジャナイ現象は人間の心理として誰も幸せにならない結果を生みやすい。

誰もが言った。『頼んだのは、これじゃない』。

ギルガメッシュはまさに、コレジャナイ現象の被害者だったのだ。

「あー、その、何だ。コレは……どうするんだ？」

ナポレオンがジャンヌ・リリイに囁く。状況打開のためと言えは聞こえは良いが、ナポレオンがジャンヌ・リリイに向けるのは継るような目つきだった。

「今更、欲しかったプレゼントなんて聞けませんよ……そもそも私、アルトリア先輩にこう言われてるんです。『英雄王には出来るだけ関わらん方が良い』って」

「つまり、欲しいプレゼントが無いから英雄王はアレになってるのか。……マジなのか？ いや、だとしてもリアクションが大きすぎないか!?!」

「あの、お二方。英雄王が物凄く微妙な表情でこちらを見つめているんですけど)」

二人の密談に立香が割って入る。玉座を見やると、ギルガメッシュは目を細めてこちらをじっと見ている。

「貴様らはサンタクロースなのだろう。プレゼントは無いのか」

声に抑揚が無い。見ているこちらの胸が痛くなる。期待の全てを削ぎ落とした虚無の声色である。瞳からも光が失われ、ついには頬杖をつき始めた。

こうなつては罫が明かない。一念発起、ナポレオンが真実を言い渡す。

「悪いな、英雄王。オレ達はプレゼントを届けに来たワケじゃないんだ。オレ達がこの塔の主のシケた面を拝んでから、いくらでも願うと良い。まあ、何だ。先に通しちゃくれんかね？」

「(言ったアー!?)」

「(意外と容赦ありませんね、初代フランス皇帝……)」

後ろで二人が呆れる中、堂々と真実を言ったナポレオン。

それに対しギルガメッシュは……みるみるうちに目に光を取り戻し、玉座から立ち上がり、怒りと威厳に満ちた表情で声を張り上げた。

「貴様……プレゼントが無いと言ったな。今であれば代替品でも赦してやろうと思っていたところに、貴様は事もあるうに『プレゼントは無い。先を急ぐから通せ』だと？ 冗談ではないわア！」

瞬時にギルガメッシュの周囲に、いくつもの『穴』が開く。ギルガメッシュの宝具……世界のあらゆる技術・宝具・物品の『原典』を納める異次元の宝物庫『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』だ。それらの穴からは、世界各地の魔剣や宝剣など、多種多様の宝具が覗く。

危険なスイツチが入ってしまった。ナポレオンの宣告は、今のギルガメッシュの精神状態を考えればあまりに残酷だったと言えよう。いや、英雄王でなくとも、あの宣告には怒りを覚えただろう。

だがナポレオンは、『まさに狙い通り』といった表情でニヤリと笑ってみせた。つまり、英雄王を怒らせ、無理矢理に戦闘状態に持ち込もうというのだ。無謀極まる。

「オーララ！ 少々強引なやり口だが、コレで戦闘には持つていけるな」

「狙ってたの？」

「おうよ。そら、気をつけな。空間が変われば、そこはもう戦場だぜ！」

部屋全体の空間が歪み、次に現れたのは……石造りの祭壇だった。かつて彼自身が治めたウルクにそびえる聖塔ジゲラットの頂上を思わせる、夜空の下の祭壇。

「その不敬、その罪業、もはや裁定するまでも無い！ 塵芥すら残さぬわ！」

「下がつてな、来るぞマスター！」

「マスター、支援をお願いします！」

動機が何であれ、相対するは世界最古の英雄王。

音に聞こえし無数の宝具が、その宝物庫より飛来する。

迎え撃つはカルデア一行。

ジャンヌ・リリイとナポレオンは、臆することなく正面に立ち、波濤が如き猛攻に立ち向かう。

つづく

## 第二層：Last Lonely Christma s その2

ギルガメツシュの宝具『王<sup>ゲート・オブ・バビロン</sup>の財宝』より、無数の武具が飛来する。だがこの程度は小手調べ。立香<sup>りつか</sup>とて英雄王とは三年以上の付き合いだ。戦闘パターンの一つや二つは把握している。

「(回避はこの場合悪手……だったら……) 皇帝陛下、突撃お願い！」  
「了解、押し通るぜ！」

ナポレオンは雨の如く襲い来る刃に向けて突撃する。紛うことなき直撃コースを、砲撃の反動を利用した急速方向転換で潜り抜け、英雄王を爆発の煙に巻きつつ接近する。

「チィ、小癩な……」  
「やああッ！」

第一波が止むと同時にジャンヌ・リリイが煙幕の中のギルガメツシュを狙う。気合一閃、槍の穂先が黄金の鎧を捉えた。金属が高い音を立てて擦れ合う。

明らかにギルガメツシュは冷静さを失っている。慢心が体の一部とも言うべき彼ですら平時はこれほどではない。付け入る隙はある。

「貫った——」  
「などと、言わせるものかアツ!!」  
「何ッ、しまっ……!?!」

煙幕の中を飛び回るナポレオンの動きが止まった。宝具の直撃とも異なるそれは……鎖であった。

ギルガメツシュの持つ宝物の一つ『天<sup>エルキドゥ</sup>の鎖』。神獣すら縛ってみせたとされる神の鎖。神に近い者ほど、その縛りは強固なものとなるが、たとえ神性を持たないナポレオンであってもその動きを縛るには十分な強度を持っていた。

「オーララ……マジかよ……」  
「よもやコレを使うことになろうとはな……もはや後悔する暇も与えぬ。八つ裂いてくれる！」

怒りの混じった声色で宝物庫より取り出した剣を振るう。煙幕を一瞬で取り払った剣閃は、突撃姿勢のジャンヌ・リリイすらその余波で吹き飛ばす。

「ハ、終わってみれば呆気ないものよ。兇戯にすらならぬ」挑発するように高笑いを始めたギルガメッシュ。

……今なら、隙がある。慢心が鎧を着て歩いているような男だ。さしずめ、戦闘でストレスが発散されて平時より増長の度合いが増しているのだろう。

「(ナポレオンが捕らえられた、となると)……私が時間を稼ぐしかないか……」

立香が決然と歩み出す。

覚悟は決めた。後はやるだけだ。

立香は英雄王を指差す。狙うは頭部。チャンスは一回だけ。

「雑種め、何を思いついた？ ……まあ良い、その遊戯に付き合ってる。我を愉しませてみせ——ガ!？」

一筋の光条が飛ぶ。必殺必中、ここぞという時に頼れる補助魔術。

自らの礼装に仕込まれた『ガンド』の魔術を英雄王に喰らわせる。

まさに致命のクリティカル・ストライク一撃。頭部にガンドを撃たれたギルガメッシュは完全に硬直した。

「リリイ、宝具お願い！」

「聖なる夜。ステキでムテキなキセキの一瞬！」

ジャンヌ・リリイが槍を掲げる。

良い子には聖夜の加護を、悪い子にもお仕置きを。プレゼントクリスマスを祝う者に、等しく聖夜の贈り物を。

謳うは聖夜の不文律、顕現するはたぐさんのプレゼント聖誕の祝福。平和のひと時を謳う

福音の名は——

『ラ・グラス・ファイユ・ノエル優雅に歌え、かの聖誕を』！

英雄王の真上から、無数のギフトが降り注ぐ。

比喩ではない。クッキー、ケーキ、ぬいぐるみ。全てが幻想から生み出されたものだが、何もかもが真実である。

ギルガメッシュは啞然としながら、プレゼントの山に埋もれてい

く。

決して数では、英雄王の宝物に勝るものではないだろう。

だが、平和で静穏なるひと時に捧げられた、無辜の祈りの尊さにおいて、この宝具に比肩するモノは数えるほどしかないと言える。

時間が経ち、プレゼントの山は光となって消えた。

その中から現れたギルガメッシュは、大の字になって寝転んでい  
る。気を失っているようだ。空間も元の姿を取り戻し、今ではギラギ  
ラと黄金に輝く一室となっている。

「ビューツ、やるな嬢ちゃん！」

いつの間にか縛鎖より抜け出ていたナポレオンが声を掛ける。第  
三層に続くドアはナポレオンが開けていた。

「無事でしたか？」

「おう。にしても凄まじいモノを見たな……あんな感じなのか、バビ  
ロニアの英雄王ってのは？」

倒れ伏すギルガメッシュを見遣りながら、ナポレオンが言う。立香  
は首を横に振って答えた。

「いや……普段でもあそこまで酷くはないと思う」

「塔の効果なのかねえ……アルテラサンタも、態度はあれだが問答無  
用って雰囲気もあつたしな……」

「今は次に進みましょう。この塔を攻略すれば、きっと全て分かりま  
すよね」

「……そうだね」

何か、引つかかるものを覚えつつも。

三人は次なる部屋へと歩みを進めるのであった。



四層構造の石塔、その最上層はどの部屋よりも簡素な設備だ。部屋  
全体も他と比べるとやや狭い。

外を覗く鉄格子が一つある以外には、外の様子を確認する術は無  
い。

ドーム状の室内を円形に囲む大量の光の点は、全てが煌々と炎を揺  
らめかせるランプだ。

格子の側に置かれた机に置かれたランプの光が、そこに座る男を仄かに照らしていた。

灰色のスーツに身を包み、髪を後ろに下げた、ヨーロッパ系の男。組んだ両手を額に押し当て、じつと目を瞑っている。

その両目……虚無的でありながら超然とした雰囲気のあるその目が開かれる。

険しい目つきで、男はこう独り言ちた。

「残念だ。彼らは理解に至らなかつたらしい……」

そして男は第三層の番人に思いを馳せる。

「彼であれば、あるいは彼らを導けるやも知れぬ。私が裁定するのは、最後まで見届けてからだ……結果は急ぐべきではない……」



「着いたね、第三層だ！」

「そんじゃあさつさと行こうぜ、マスター<sup>マスター</sup>」

木の軋む嫌な音を立てて、第三層の扉が開く。

第三層はそれまでの階層とは異なる、禍々しい様相を呈していた。

部屋を照らす光は、鬼火と呼ぶに相応しい青い炎。超常の光は、室内を小さく照らしている。

一寸先ですら闇の中。視界はほんの少ししか保たれていない。第三層に渡る階段も暗かったが、ここはそれよりも暗く感じた。

「リリイ、部屋全体は見える？」

「見えません。どうなってるんでしょうか……？」

その時であつた。

ひそひそと闇の中で囁き合う彼女らを、縫い止めるが如き声が響いたのは。

「よくぞ来た。我が怨嗟の天牢に」

地獄より響く幽鬼の声。人にあつて人にあらず、悪鬼にあつて悪鬼にあらず。

誰もがその声を知っていた。その瞳を知っていた。

闇の中で黄金に輝く、虎の瞳。

怨讐の彼方を知る者。怨讐の果てに向かう者。

世界に謳われた復讐劇の主人公。そうあれかしと願われ、その姿を英霊のカタチと成したモノ。

白髪鬼、虎、あるいは……『モンテ・クリスト巖窟王』。

アウエンジャー復讐者・巖窟王／エドモン・ダンテス。

恐るべきエクストラクラスの英霊が、その闇の中に立っていた。

「オーララ……因果じゃねえか」

「最後の王って……巖窟王だったの!？」

「そういうことだ、我が共犯者。此度はオレも囚人の一人というワケだ」

巖窟王が腕を振ると、闇が晴れ、薄暗い石室が現れる。あの闇の間は巖窟王が張っていたものであったらしい。

「師匠のお友達さんですね？ でもどうしてここに？」

「さてな、詳しい事は塔の主に聞け。もつとも、今のお前達では難しかろうがな」

「どういう意味です？」

「今のお前達は、あの男の求める域に達していない。故に、オレはこの塔最後の番人として、お前達を試すということだ」

だが殊に今回において、この男の存在は違った意味を持っていた。

「まさかオマエが最後の番人とはな……エドモン・ダンテス」

「その名は捨てた。オレはただ復讐鬼として此処にある」

「……オレが憎くないのか」

ナポレオンが問う。巖窟王は一瞬の後、続ける。

「くだらぬ問答を続けるなら、今すぐにその首を掻き切る……と言えば？」

「その方が妥当だろうな……すぐに始めようぜ」

立香は身構える。ナポレオンと巖窟王に複雑な事情があるのは聞いたことがあった。

巖窟王の原点、冤罪による監獄島シャトー・ドイフへの投獄。当時ナポレオンは失脚を迎えエルバ島に幽閉されていた。この時期にエドモン・ダンテスと面識を持ったことが、エドモンを取り巻く陰謀に利用されることとなった。後にナポレオンは復権を果たすが、すぐに二度目の失脚を迎



え、ついでエドモンを解放することは叶わなかった。

ナポレオンはエドモンを救えなかったことをひどく後悔している。故にこそナポレオンは、これから始まる戦いを必然の運命、逃れられぬ因果と捉えていた。

室内が一変した。

空には満月が浮かび、辺り一面は夜の砂浜と化す。

誰がその光景を願ったか——知る者はいない。

「二人とも、気をつけて……！」

「お任せを！」

「この因果に、ケリをつけようじゃねえか……エドモン！」

巖窟王はニヤリと笑い、黒いマントを翻す。

「来るがいい……貴様は、我が姿に何を見る？」

超絶の復讐鬼が、黒い炎を纏い始める。

つづく。

### 第三層：復讐は誰のために

月光が白い砂浜を照らす。

「貴様は、我が姿に何を見る？」

「オレが見るのは、あの日の後悔……それだけだッ！」

怨嗟纏う炎が、ナポレオンに向けて放たれる。

ナポレオンは避けずに正面から撃ち返す。

衝突、そして爆発。砂と飛沫が舞い散る中、両者は互いを見つめ続ける。

「悪いな、マスター<sup>メイトル</sup>。付き合わせちまってよ。これはオレとアイツの因縁だ。しばらく二人きりにさせちゃくれないか」

ナポレオンが立香に語りかける。これは個人的な因縁による闘争、つまりは私闘だ。ナポレオンとしてはそこに無関係のジャンヌ・リイや立香を巻き込みたくはなかった。

「でも彼は強いよ」

「ああ、そうさ。今の一撃だけでも十二分に伝わってきやがる。だがオレは、今この時だけは、初代フランス皇帝ナポレオン・ボナパルトとして、あの男と真ッ正面から向き合わないといけないのさ」

いつもとやや異なる雰囲気、ジャンヌ・リイは無言でそわそわと落ち着かない素振りを見せている。

だが立香の表情は変わらない。平時と変わらぬ笑顔で、彼女はこう言った。

「なら、私も手伝うよ。皇帝陛下、貴方の見てる世界を見せて！」

「……ハッ、そうだな。お前さんは、言葉で聞かせて止まるタイプじゃなかったな！<sup>D'accord</sup> 了解だ！ ついて来な！」

マスターの決断を待ち、後ろに控えていたジャンヌ・リイが槍を構える。巖窟王はその様を見ながら、ニヤリと笑った。

「流石は皇帝陛下。貴様もまた、オレの類型というヤツか」

「求められたからには応える。これがナポレオンだッ！」

腰だめに構えた勝利砲から光線が放たれる。巖窟王は難なくこれを避けるが、追撃の光弾が襲いかかる。

「やるな……幼子とはいえさすがに聖女かッ！」

「貴方に恨みはありませんが、サンタアイランド仮面第一の弟子として、貴方に勝たせてもらいます……ツインアーム・リトルクランチ！」  
赤と緑の光弾が弾けた。空中機動で回避しつつ、高速でジャンヌ・リリイに迫る。

巖窟王は比較的近代の英霊だが、スピードという点においては神秘の多い時代の英霊にも引けを取らない。

高速移動ですれ違いざまに闇の炎を浴びせ、ナポレオンとジャンヌ・リリイを追い詰めていく。

「瞬間移動か何かか……動きが速すぎる。攻撃チャンスを作らないとな」

「私とナポレオンで支援する。リリイ、行つて！」

「了解しました！」

リリイは矢面に、ナポレオンと立香が並び立つ。立香が右手を前に突き出すと、手の甲に刻まれた赤い紋章——令呪れいじゆが眩く輝く。

「令呪を以て命ずる！ リリイ、宝具を解放して！」

三画の令呪、その一画が消失し、ジャンヌ・リリイに魔力が漲る。

『優雅ラ・グレースに歌え、かの生誕ユ・ノエルを』！ 悪い子には、お説教ですよ！」

英雄王にしてみせたように、プレゼントの雨を降らせる。

しかし巖窟王は、これで止まる程の男でもなかったのだ。

「ハ、福音の束とて、踏破しよう。我に祝福は無く、楽土に至る道は無い。故に……我が往くは怨讐の彼方——『虎アンフェルよ、煌々と燃え盛れ』！」

先程までを遥かに超える高速移動。瞬間移動と比較しても大差ないレベルの速度で、虚空に残像を生みながら次々とプレゼントを切り刻み、燃やしていく。

……英霊といえどこの速度の移動に耐えうる者は少ない。これに耐えるのは、シャトー・ディフの地獄で鍛えられた、巖窟王の強靱なる鋼鉄の精神である。

怨嗟の炎は煌々と、白い月の下で燃え盛る。

怨讐の牙は虎の如く、夜の闇の中で光を放つ。

即ち超人。巖窟王もまた、不可能を可能とした伝説である。

しかしながら。

出鼻を挫かれて尚立ち上がる、男がいた。

ただ一人、その男は、仲間の目が諦めに染まりつつあるその様を見  
ていた。

「どうした、まだ終わってねえだろ?」

勝利を示す大砲を、天に掲げるその男。

消えぬ炎の快男児。初代フランス皇帝。『不可能などない』と語る、  
可能性の男。

「さあ、願え。オマエたち人類に不可能は無い。その願いがある限り——」

可能性を束ね、虹の極光を放つ凱旋の皇帝。

彼は高らかにこう告げる。

「オレが!　ここに!　いるぜ!」

伝説を成し遂げる男、ナポレオン・ボナパルト。

その目に、一切の曇り無し。

勝利砲の砲身が展開し、内部に隠された機構が露出する。

大柄なナポレオンの体躯すら上回る、巨大で無骨な大砲。露出した  
内部機構のエネルギーラインは虹の光を灯す。

砲口が光る。エネルギーが充填されているのだ。発射は秒読みの  
段階に入った。

『凱旋を高らかに——』

束ねるは人の可能性ねがい。神の意志をも打ち砕く無辜の祈り。

これを以て勝利し、これを以て凱旋を成す。

虹の極光は、空に可能性の橋を架ける。

『告げる虹弓!』

人の願いに応え、許容するモノ。

数多の可能性を虹と成し、それを弾丸として撃ち放つナポレオンの  
最強宝具。

『凱旋を高らかに告げる虹弓』。

現在、フランスはパリのシャルル・ド・ゴール広場に位置する、エ  
トワール凱旋門と同じ名を持つ宝具。

空駆ける可能性の橋が、地を斬り裂いて眼前の闇を照らす。

月明かりと虹の光が、夜の闇に包まれた巖窟王の表情を暴く。それは、酷く驚きに満ちた表情だった。

そしてその表情のまま、巖窟王は虹の光に吞まれていった。



空間が暗黒の牢獄に戻る。

どうやら、勝利は出来たようだ。

後ろで始終を見ていた立香とジャンヌ・リリイが、疲れを隠して笑顔でハイタッチをしている。

「ふう……これで決着、つてところか」

ナポレオンは激闘の後の憩いとして葉巻を吹かしていた。

立香は仰向けに倒れている巖窟王に駆け寄り、質問を投げかける。

「さっき言ってたよね、私達を試すつて。どういう意味？」

巖窟王は無然とした視線をぶつけながら立ち上がると、扉の方へ歩いていく。

「詳しいことはこの塔の主に聞け。だがまあ……敢えてオレから言うならば、今回についてはお前が敗北する可能性もある」

「へ？」

「会って話せば分かることだ。なぜこの塔にオレ達が囚われたのか、なぜクリスマス間近にこのような異常が発生したのか、そして塔の主とは何者なのか。全ては最上層で、あの男から聞けるだろうさ」

そう言つて、巖窟王は暗闇の中に溶けるように姿を消した。

「マスター、アイツから何か聞けたか？」

「詳しいことは、この上で聞けるんだつて。他は何も」

「そうか……なら、進むのみだな」

「行きましょう。この先が最上層です！」

最上層へと続く回廊。その扉へと手を掛ける。

軋むような音と共に扉が開くと、三人は先へと歩み始めた。

つづく

## 最上層：超人のキャロル

暗闇の一本道を、黙々と進む一行。

流石に立香にも疲れが出てきたらしく、その表情は険しい。

「少し休みますか？」

ジャンヌ・リリイが優しく語りかける。こういうところは、聖処女ジャンヌ・ダルクにそっくりだ。

立香は笑顔を向け、ジャンヌ・リリイに言う。

「まだまだ、この塔のてっぺんに行けば、それでカタがつくから。そしてたら三人でカルデアに戻って、クリスマス準備の続きをしようか」「分かりました。でも無理は禁物ですよ？」

立香は笑顔のまま頷き、彼女の前に行くナポレオンを見た。

彼も無言で頷いている。彼もカルデアのクリスマスを楽しみにしていた一人だ。心中は穏やかではなからう。

かくして三人は、長い回廊の果てに、最上層の間の扉を発見した。

「ようやく最上層、だね」

「そんじゃ、殴り込みに行くとするか！」

「これが最後ですね。パパッと片付けましょう！」

立香が扉を開けた。

石塔の最上層は、他の層よりやや狭く、設備も非常に簡素だ。一つだけ存在する窓の側には、ランプが乗った机が置かれている。部屋全体を照らすのも、電球ではなくランプの炎だ。

立香達はその机から少し離れた場所に立つ、痩身の男を見出した。

灰色のスーツを纏い、雪のように白い髪をオールバックにした男。

ヨーロッパ系の顔立ちから、彼が少なくとも日本人ではないことを、立香は感覚的に理解する。下を向いたその顔は、影がかかったように表情が窺い知れない。

この異常事態の主と思しき目の前の男が、明らかに初対面の英霊であるということも、三人は瞬間的に察知した。

「えーと……初めまして？」

立香が男に話しかける。初対面の相手なのだから、恐らく間違っ

いることはあるまいと、それらしい台詞を言っではみたが……次の瞬間にはその表情は一気に凍り付くことになる。

男の視線が、立香に向いた。

超然とした、しかし虚無的な眼だった。

ブラックホールを思わせる双眸だった。

世界の全てから隔絶されながら、世界を確固たる意志で見つめる眼だった。

吸い込まれるような黒い瞳を見つめる立香の視線が閉ざされる。

背後にいたナポレオンの手による目隠しだった。

「(マスター、あの眼を見るな。邪視イビルアイの類じゃねえが、アレを見続ければ……神格であろうと縛られるかもしれん)」

ナポレオンが立香に耳打ちする。その声色は深刻そのものであった。

酷く億劫げに、男の口が開く。

「そうだな、カルデアのマスター。まずは自己紹介から始めよう。我がクラスは裁定者ルーラー。真名はフリードリヒ・ニーチエ。この特異点の主人をしている」

男はあまりにあっさりとして、自らの正体を明かした。



フリードリヒ・ニーチエ。

一九世紀ドイツの哲学者であり、近代ヨーロッパの思想基盤に多大な影響を及ぼした思想家である。

近代ヨーロッパにおける思想基盤、その根幹にあつたのはキリスト教である。ニーチエはルター派牧師の長男として生まれたが、その後の生涯にてキリスト教をはじめとする一般道徳の根幹には『強者』への怨恨感情があると提唱している。

後のニヒリズムにも繋がるその思想は、時として政治利用に遭いつつ、現代に至るまで研究の対象となっている。それだけ当時としては特異な思想であつたとも言えよう。

そのフリードリヒ・ニーチエが、英霊としてこの石塔の最上層に立っている。それも、事もあるうに事件の黒幕として。

「さて、質問があるなら今の内だ。私は答え得る全ての質問に答えてみせよう」

ニーチェは椅子に座ると、足を組んでナポレオンとジャンヌ・リイを見据える。その瞳は依然として、深淵に通ずるように暗い。

「フリードリヒ・ニーチェ……本当にお前が、あのニーチェであるのなら、この塔は何だ？」

ナポレオンが深刻な表情で問う。立香の目は塞がれたままだ。

「永劫回帰石塔・エイヴィヒカイト。私はこの特異点をそう呼んでいる。元は私の宝具であつたものを、特異点の聖杯を利用して拡張したものだ。道中で発生した空間変容も、この石塔の機能だよ」

「自身の心象風景で現実を侵食する……固有結界の一種か」

「魔術師の世界には明るくないが、まあそういう類のものだと認識して構わんよ」

「リリーの嬢ちゃんに送られた書状……アレは？」

「私が送った。内容を諳んじることにも出来るぞ」

「カルデアから英雄王やアルテラを連れてきたのは」

「それも私だ」

……あまりにあつさり、聞かれた全てを自供するニーチェ。

その自供内容を簡潔にまとめると、以下の通りとなる。

人理焼却の影響で生まれた小さなバグのような情報の奔流。そこから現れた聖杯より呼び出されたルーラー・フリードリヒ・ニーチェは、自らの宝具そのものを特異点化するという暴挙に出た。

特異点として定義された一八四四年のライプツィヒ郊外の村、それはニーチェ出生の地と年代である。

彼の第一宝具『人よ惑え、牢獄の名は永劫回帰』は、使用者だけでなく効果対象の心象すらも利用して様々な姿を見せる特殊な固有結界であつた。今回はそれが、雪降る村とそこに立つ石塔の形を取つたというだけの話である。

彼は特異点を観測したカルデアのシステムからその存在を逆探知し、カルデアの観測システムと聖杯を繋ぐことで特異点を維持しつつ、自らが選別した三騎のサーヴァント……即ち『三人の王』を拉致



し、石塔に縛り付けた。

仕上げとしてジャンヌ・リリイに挑戦状を叩き付け、カルデアからの来訪者を待つていた……というのが、ニーチェの語った事の顛末であった。

「理解していただけたかな？」

ニーチェが眠たげに言う。どうも酷く退屈しているようだ。

しかし、そこに質問を投げかけた人物がいた。

「いや、まだだよ。貴方は、まだ真実を隠している」

ナポレオンに目隠しをされたままの立香だった。彼女には未だに不明瞭であった点がある。

『三人の王』の選定基準は何だったのか？

なぜ挑戦状を叩き付ける相手がジャンヌ・リリイだったのか？

そもそも、この騒動を起こしたきっかけとは何だったのか？

立香はその三つを矢継ぎ早に問うた。

その横でナポレオンは……目が覚めたとばかりにその表情を強張らせた。ジャンヌ・リリイは虚ろな目でその話に聞き入っている。

ニーチェの声、視線、仕草。その全てが精神を縛り付け、戒める鎖となっている。魔術のような神秘に頼らない純粹な概念が、カタチの無い言霊としてジャンヌ・リリイの精神を縛ったのだ。

「……ああ、そうだな。お前はそもそも、何のためにこの特異点を作った？」

「存在の形式と意義。それを知るためだ。クリスマスの時期にこのようなことをやっているのも、今回の議題が、サンタクロースだったというだけのこと」

「存在の……意義？」

「そう。聖女の幼少期として在る彼女にわざわざ挑戦状を送ったのも、『三人の王』も、全てはそのための材料に過ぎない。だが……そこから先は、残念ながら私が答えを言うワケにはいかない」

目の色が、声色が変わった。

確固たる意志によって、口を固く閉ざす決意を固めた姿だった。

「どういう意味だ？」

「巖窟王から聞いていないか？ 彼は最後の王として、君達を導こうとしていたのだが、なるほどこうなると、どうも伝わっていないかもしれない。それ自体は仕方の無いことではあるが。最後に答えを出すのは、君達自身でなければならぬからな。敢えて結果を通達するなら——今回は残念ながら不合格だ。一から出直したまえ」

世界が暗転する。足元すら見えない闇の空間で、しかしながら立香はナポレオンとジャンヌ・リリイ、そしてようやく立ち上がったニーチエを視認する。

一瞬の浮遊感。浮いているのではなく、落ちている。感覚として理解できる。死ぬのでは、と立香は思った。

立香の脳内に声が響き渡る。ニーチエの声だった。

「やつと目を合わせてくれたな、カルデアのマスター。さて、君に最後の警告だ。ジャンヌ・リリイの身柄は預かる。次こそは、答えを抱き私の下に来るがいい。その時は私も、正しく全てを明かすでしょう」

その言葉を最後に、立香の視界は完全に閉ざされた。

つづく。

## あわてんぼうの皇帝陛下

寝ぼけ眼を擦りながら、ゆっくりと起き上がる。

周りを見渡すと、少なくとも現代日本ではない、雪に包まれた村の風景があつた。そして、目の前には雪に晒されて真っ白になった、四層構造の石塔が立っている。

「……失敗したのか……」

人理継続保障機関フィニス・カルデア所属のマスター、ふじまるりつか藤丸立香は、落胆混じりの声で呟いた。

彼女は失敗した。

変異特異点、永劫回歸石塔・エイヴィヒカイトに挑み、待ち受ける強敵を退け、最上層に辿り着いた。

しかし、塔の主に不合格の烙印を押され、彼女は塔から叩き出されたのだ。

しかも現在、石塔の最上層には同行者であつたランサーのサーヴァント、ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リイが囚われている。さて、どうしたものか。これでもう一人の同行者であつた彼が居てくれれば――

そこまで思い至つたところで、彼女は背後を見た。

一瞬、その姿に驚いた。もう一人の同行者、アーチャー・ナポレオンだ。

しかし彼は、普段からは全く想像出来ない程の落ち込み様を見せていた。足も腕もだらりと伸ばし、上体だけを起こして虚ろな表情で何事かブツブツと呟いている。無温ながら吹き荒れる風の音で何を言っているのかは判別出来ない。

だがしばらくすると何か閃いたのか、彼は唐突に立ち上がった。

「そうか……俺は、何てバカをやっちゃったんだ……」

「どうしたの、皇帝陛下」

立香が問う。最早隠し立てする必要もないとばかりに、ナポレオンは正直に全てを白状した。



石塔を登る道中で、ナポレオンは何か妙に急いでいる様子だった。少なくとも第二層、アーチャー・ギルガメッシュとの戦闘時には真つ先に臨戦態勢に入った上に挑発まで行って戦闘に移行している。アヴェンジャー・巖窟王との戦闘においても戦闘開始までの流れは迅速だった。

いくら第一層……アルテラサンタとの戦闘を通して、塔の進み方を理解したにしても、些か強引に過ぎる部分があったのは事実である。かと言って、ナポレオンが特に何かこの塔の秘密を知っていたとも思えない。というより、彼はその手の隠し事を行うタイプの英霊ではない。

では何故、あんなにも解決を急いだのか？

「オレにとつて、カルデアのクリスマスは今年が初めてなのは知っているよな？」

「うん」

「それでな……許せねえな、と。ただそう思った。クリスマスってのはどんな奇跡も許されていい日だ。星が降り、夜空に虹を架け、サンタクロースを乗せたソリが、ジングルベルを鳴らしながら空を往く。そんな日をブチ壊す輩がいる。一刻も早く、このバカ野郎を懲らしめてやろうと思った。けどよ……間違つてたのさ、最初から」

ナポレオンはしゃがみ込み、空を見上げる。夜の空には雲がかかり、星一つ見えない。

「オレは英霊だ。望まれたが故に此処に在る。だが今回のオレは、心を逸らせ過ぎて一人で突っ走っちゃった。マスターやリリーの嬢ちゃんもいるのにな？ ……今回の失敗はオレの責だ。その上で、なんだが……あと少しだけ、オレに力を貸してはくれないか？」

「いいよ。一緒に、クリスマスを取り戻そう」

即答だった。聞かれるまでも無い。自分はナポレオンのマスターだ。サーヴァントに力を貸すのは当然のことだった。請われたならば、尚更である。

「ありがとよ、マスター<sup>メル</sup>。さて、辛気臭えトコロ見せちゃったな。ここから反撃と行こうや！」

「まずは、どうする?」

「そうだな……敢えて、一時撤退というのはどうだ?」

「へ?」

撤退? あのナポレオンが?

疑問符を浮かべる立香。しかしナポレオンには何か秘策があるらしい。

「ダ・ヴィンチに連絡を取って、一時的に帰還するよう伝えてくれ。事情は、オレの方から説明する。ああ、それと……聞いておきたいんだが、今は何日だ?」

「今は……十二月二一日だね。出発してから向こうでは一日経ってることになる」

「なら、今日を入れて三日間つてところか。上々だな、多少ハードな作業にはなるかもしれんが……やってみせるさ」



かくして、ナポレオンの言うがままに、本当にカルデアに戻ってきてしまった。帰還のためのレイシフトを交渉するのは骨が折れたが、カルデアの現司令官代理を務める魔術師・レオナルド・ダ・ヴィンチとしてもナポレオンの善性や火事場の馬鹿力じみた秘策には多少なりとも信頼を置いていたところがあるため、とりあえずは問題なく帰還できた。ダ・ヴィンチはむしろ、ナポレオンの提案とはいえ、今までは異なり『途中での帰還』を選択した立香の方に疑問を持っていた。

そして、ナポレオンはぱったりと姿を消した。

それに伴って一部のサーヴァントも、クリスマスパーティーの準備に姿を見せなくなった。その中には、カルデアの初代サンタサーヴァントであるアルトリア・ペンドラゴン・オルタも含まれている。

立香はジャンヌ・リリイと仲の良かったサーヴァント、暗殺者・ジャック・ザ・リッパーや魔術師・ナーサリー・ライムと共に、カルデアの広大な施設を利用した大規模なクリスマスパーティーの飾り付けを行いつつ、ナポレオンの帰還を待っていた。

何かが起ころうとしているのは間違いない。

立香は奇妙な胸騒ぎを感じながら、三日間クリスマスパーティーの準備に励んだ。



そして、十二月二四日、午前五時。クリスマス・イヴの早朝に、立香はレオナルド・ダ・ヴィンチからのモーニングコールを受け、寝ぼけ眼を擦りながら、再び一八四四年のライプツィヒに向かった。

単身でのレイシフトだったが、肝心のナポレオンはどうも先行して辿り着いているという話であった。

さて、レイシフト先は変わらず雪降る無人の村。しかし以前と決定的に違う点が幾つもある。

石塔だ。石塔が、赤と緑の煌びやかな装飾で飾り付けられている。

無数の光の明滅は、蔓のように巻きつけられた電飾。

塔全体を飾る七種類の色のモールには、ドイツやフランスをはじめとする様々な国の国旗が吊り下げられている。

石塔の扉には、”Joyeux Noël”と彫られたクリスマスリースが飾られている。フランス語で『メリークリスマス』の意だ。

塔の最上層には、クリスマスツリーの頂点に置くトツプスターが四つ並ぶように置かれていた。

一体誰が？ いや、ここまでやるとなれば、考えられるのは一人。

立香は背後を振り向く。

「Joyeux Noël, Madame!」

「ナポレオン！ ……って、その姿は？」

サンタクロース風の衣装に身を包んだ、ナポレオンの姿があった。



ナポレオンの姿は、明らかに平時の軍服姿とは違う。

軍服をアレンジした服装ではあるが、色合いは赤と緑、そして金色の三色がメインである。

左胸には四つの星を象ったワツペンを付けている。

普段たすき掛けにしている帯は、七色に煌めく別の帯に変化している。

そして何より特徴的だったのは……彼が剣を持っていたことだ。

波打つ刀身を持つ大剣は、黄金に輝く柄と、虹色の刃を持つ。

ナポレオンが普段使用する大砲、勝利砲は何処に消えたのだろうか。

「コイツが気になるか？ 聞いて驚くなよ？ これこそは……フランス王権の象徴、聖剣ジュウユーズだ！」

聖剣ジュウユーズ、その名を聞いて立香は驚くと同時に疑問を抱いた。

カルデアには古今東西様々の英雄がいるが、その中には伝承に由来する英霊も存在する。

立香がその剣の名を聞かされたのは、シャルルマーニュ……フランス王国の王であり、後にローマ皇帝となった男、カール大帝の話聞いた時であった。

証言者は、伝説に名高いシャルルマーニュ十二勇士が一人、騎兵ライダーのサーヴァント、アストルフオである。

昔語りとして彼が聞かせた話の中に、聖剣ジュウユーズは登場した。

曰く、『その剣に並ぶものは無いとされる名剣』『日に三十回は色彩を変えた』とか。

シャルルマーニュとカール大帝の関係について、アストルフオは多くを語らなかつたが、ともかくそういった聖剣の類は存在することを立香は事前に知っていた。

ジュウユーズは後の時代において、フランス王権の象徴としてあり続け、絵画にも描かれている。かく言うナポレオンの戴冠式においても、ジュウユーズは用いられたのだ。

そして現在は美術館にて現物が展示されているのだが……それにしても、何故ナポレオンはジュウユーズを所持しているのだろうか。

その疑問に答えるように、ナポレオンは剣の出自を語り始めた。

「聖剣ジュウユーズの現物は、確かにフランス王家に存在していた。だが、フランス革命の際にオリジナルが紛失しちまってな。戴冠式にジュウユーズを使用するために、レプリカを作らせた……という話になっている。どこまで信じるかはオマエ次第だ。オレはこの伝説と

皇帝特権のスキルを利用して、ジユワユーズを手に入れたって寸法さ」

なるほど、言われてみると立香も納得する部分はあった。

ここにいるナポレオン……かつてアーチャーだった英霊ナポレオンは『後世に付随した数々のナポレオンに纏わる伝説』を基に生まれた存在である。二メートル近い高身長も、それらの伝説に見合った男として召喚されたが故だ。

であれば、『聖剣ジユワユーズに纏わる伝説を基に、霊基を弄って別のクラスで現界する』ということも、彼ならば可能だったということになるろう。アーチャー・ナポレオンが為したのは実際恐るべき離れ業だったのだ。セイバークラスへの変化は、『本来持ち得ない才能であつても、本人の主張によつて一時的に獲得できる』皇帝特権による部分もあるのだろうか。

「まあともかく、だ。アーチャー改めセイバー・ナポレオン・ボナパルト・サンタ、ここに参上ツてなア！」

意気揚々と名乗りを上げるナポレオン。

それは、カルデア四人目のサンタクローズ・サーヴァントとしての凱旋の宣言であつた……のだが。

ここまでなら、良かった。だが立香は気づいてしまった。

ナポレオンの背後にある、漆のように黒光りする謎の戦車に。

戦車、と言つても近代におけるキャタピラと砲門の付いたものではない。形状は原始的なチャリオットや馬車に似ている。

優雅な金のエンブレヴィングが、黒い車体に映える美しい色合い……その印象をも掻き消すような、二頭の金属製の馬。

間違いなく普通の馬ではない。先程から一切動かないのは、寒さに凍えているのではなく、それらが起動していない機械製の馬であるからだろう。

機械馬の曳く車体の車輪は、明らかに雪上走行に対応した、立香でも見覚えのある現代式のタイヤである。古めかしさは微塵も無い。

車体の形状も何かがおかしい。立香は馬車の車体には、左右対称に見えるものか、あるいは車体が前面にせり出しているものをイメージ



したが、この戦車は車体が後ろ側にせり出している。更に言えば左右対称ではなく明らかに後ろの方が小さい。恐らく後部座席というものは確保されていない。

立香は恐る恐る、この異様な戦車について尋ねる。

「皇帝陛下、一つ質問が」

「ん？」

「アレ、何」

「ああ、アレか……アレはな……ソリだ」

「何て？」

「ソリ、だ」

「……アレが？」

「おうよ」

「……なんか、後ろに長くない？」

そこ以外は聞けなかった。何か恐るべき狂気と深淵の入り口に見えてしまっていた。

対するナポレオンの回答は、あまりにも立香の度肝を抜くものだった。

「ああ。今のオレはセイバーなんで、勝利砲は使えん。が、それはそれとして……霊基を変えたとして、オレがかつてアーチャー・ナポレオンであったことは変わらん。そういうわけで、ソリの車体として勝利砲を改造することにした。設計はバベツジが引き受けてくれたぜ、カッコいいだろ？」

「……まあ、だいたい分かったよ。でも、どうしてサンタに？」

立香が問う。しかしナポレオンは、この場で答える必要はないとばかりにはぐらかした。珍しい……が、理解もできる。

彼は、行動で示すタイプだ。つまりこの塔を登った先に、答えはあるのだろう。立香はひとまずナポレオンを信じることにした。

「ソイツはまあ、おいおい話していくとしよう。とりあえずは、塔に乗り込もうじゃねえか。攻略法はこの三日で掴んだ」

そう、ナポレオンは三日間、クリスマスムード漂うカルデアから姿を消していた。恐らくその三日間に何か秘密があるのだろうか……

先の言葉に従い、立香は敢えて問うことはしなかった。  
かくして二人は再び、永劫回帰の名を冠する石塔に足を踏み入  
る。

迎え撃つは『三人の王』、そして石塔の頂に立つフリードリヒ・ニ  
チエ。

クリスマス・イヴの早朝に、ジングルベル決戦の鐘が鳴り響く。  
つづく。

## 再走・第一層：アルテラサンタがやってくる

石塔の第一層は、扉を開けて直ぐにその内装を露わにした。

前回訪れた時と何も変わっていない、クリスマスにちなんだ煌びやかな装飾の施された部屋。中心に置かれた巨大なクリスマスツリーも何一つ変わってはいなかった。

「つてことは……アルテラもいるよね？」

「そうだな、フンヌの大王サマ……いや、サンタの先達がここにいる。だろ、アルテラサンタ！」

「よくぞ見抜いた、挑戦者。フンヌのクリスマスルームへようこそ、だ」

果たして『第一の王』アルテラ・ザ・サン〔タ〕は、展開した天井裏から、羊に乗って現れる。

「さあ、プレゼントを渡しに来たぜ！」

「……？ その姿は……まさか！ 今年のサンタはお前なのか、英霊ナポレオン？」

「ああそうさ。ここにいるオレこそが、カルデアの四代目サンタクローズ……ナポレオン・ボナパルト・セイバー・サンタクローズだ！ ナポレオンは高らかに宣言する。

謂わばサンタクローズの戴冠式。かつてフランスにて新たな時代を拓いた男は、サンタクローズとして振る舞うにあたって、新時代の先駆であることを誓う。

「なるほど、お前が第四のサンタクローズか。良いぞ、私は嬉しい。だが……まだ足りない。不足がある。ならば私は、サンタの先輩として、お前を教え、導こう」

アルテラサンタの視線がナポレオンの方を向いた。その目は厳しく、しかしながら優しさと喜びに溢れている。

彼女は決心していた。サンタクローズの先輩として、自分が教え、彼を導かねばならない、と。

「心遣い、感謝するぜ。お互い全力で行こうじゃねえか。マスター、準備はいいな？」

「了解、戦闘準備！」

立香に迷いはない。ナポレオンが何を言わずとも、彼女は彼を疑うことはなかった。『少なくともここまで来てただ自棄になっただけではなからう』という信頼があった。

部屋の内部が一瞬にして、夜の雪原に切り替わり、聖夜に二騎が剣を取る。

右手に手綱を、左手にプレゼントを。

平和を約束された、決死の決闘が幕を開ける。



先手を取るはナポレオン。黒光りする車体の戦車が虚空から姿を現わす。何度見てもソリには見えない。

「乗りな、マスター！ 夜空に虹を架けようじゃねえか！」

「待った、一体何を……」

問答無用とばかりに、米俵めいて肩に担がれる立香。車体に叩き込まれるが、適度に温かく柔らかいクッションがその身体を危なげなく受け止める。

「初手から宝具を切ったか。良いぞ、では速度を競うとしよう！」

アルテラサンタは自ら乗る羊のツエルコと共に、夜空に向けて飛翔する。

流星の如き速さで、カルデア三代目のサンタが星空を駆ける。

「何これ？」

立香の隣にナポレオンが座る。手に持った聖剣の刃が縮み、イグニッションキーを象ると、ナポレオンは躊躇いなくキーを挿し込む。一つ捻れば駆動音。内装は豪華ながらいささか窮屈な車体が、LED電飾の明るい光に照らされる。ナポレオンが座った運転席には、乗用車のハンドルが現れた。

「ベルトを締めて口を閉じな、舌を噛むぜ！」

「へ？ むぎやっ!？」

予備動作などない。全速力の発進が衝撃となって立香を襲う。

機械の馬が嘶くと共に、黒い戦車が星空に向けて突き進む。

舞台は空中。この石塔は『入った者の心象を取り込む固有結界』で

あり、内部においてのみ質量保存の法則からは自由である。二騎は明らかに高度一千メートルの上空にいるのに、一向に天井に辿り着く気配が無いのも同様の理由である。

そして現在、ナポレオンと立香は雲海を駆けるアルテラサンタを追っている。

アルテラサンタのソリ……羊のツエルコは、本人が言うには『初代サンタ・アルトリア・オルタよりも速い』とのことだが、実際そのスピードは規格外と言う他ない。虹の尾を引いて、羊の群れを連れて夜空を走る姿は異様でこそあれ、幻想的だ。

かと言って何もナポレオンが遅れを取ったわけではない。元々が宝具だったモノをソリの車体として再設計しただけであり、出力だけならば歴代でもトップクラスである。後部座席は無いがトランクは確保されており、その中には様々なクリスマスプレゼントを詰め込んだ袋が入っている。それでいて、アルテラサンタに引けを取らぬ速さだ。尋常ではない。

アルテラサンタが方向を急転換する。羊の群れも歩みを止め、横一列に並ぶ。アルテラサンタは懐から白い付け髭を取り出すと、何とも言えない微妙な老人口調で喋り出した。

「ふおつふおつふおつ。よくぞ来た、新米サンタよ。私はアルテラサンタ。カルデアの三代目サンタクロースじゃよ。早速じゃが、私はお主に試練を課そう。これは私からのクリスマスのプレゼントじゃ、心して受け取るがいい」

「オーララ！ フンヌのクリスマス、ご教授願おうか！」

ナポレオンがイグニッションキーを捻る。立香は次の瞬間、その光景に目を疑うことになる。

戦車を曳いていた二頭の機械馬が変形を始めた。前脚と後脚を折り畳むと、腹の部分から二つの車輪が出現する。ハンドルやペダルが無いという点に目を瞑れば、その形状は完全に自動二輪車オートバイである。そして現れた車輪は横倒しになり、高速回転を始める。摩訶不思議の力によって虹色に輝く六つの車輪が、揚力を発生させていた。

更に車体後部の側面が展開し、二門の砲塔がせり出した。砲塔は忙

しく首を動かし、標的を探している。

車体全面に張り巡らされた金のエンブレが輝き、トランクルームから熱を纏った蒸気が発せられる。見ればトランクに詰め込んだ袋は、虹色の光を放つ不定形の物質を内包したシリンドラーと化し、その管は外に突き出した砲塔に繋がっていた。

物理法則を超越した大変形。クリスマススの奇跡が為せる技である。「人よ願え、この聖夜に奇跡を起こさん！ここにオレが……サンタクロースがいる限り！」

人の道とは、行く先ではなく通った背後に現れるもの。彼が征くはまさしく、次代の道。先駆となつて希望を示す星。そして旅の果てに人々に、甘美なる報酬を齎す道だ。

前人未踏のソラを目指す戦車が、夜に虹の道を架ける。

これぞナポレオン・サンタの第一宝具。その名は——  
『シャール・ドゥ・ノエル・ドゥ・レットワール聖夜を高らかに告げる虹輪』！』

虹の六輪は、熾天使の六翼が如く火花を散らし、夜空を明るく照らす。それは謂わば夜の太陽、白夜の光輪。落日を超えて輝く星。ナポレオン・ボナパルトの在り方を表すが如き、暗夜を突き進むトツプスター。  
手綱ハンドルを握り、アクセルを蹴りながらナポレオンは高らかに己が愛馬チャリオットに命ずる。

「夜空を照らし、雪を蹴散らし、勝利の鐘ジングルベルを鳴らす時は来た！ここにオレ達のクリスマスだッ！」

立香は啞然としてこの光景を見ていた。絶句。ただひたすらに絶句。

もはや言葉も無い。月より眩く輝く車体の光に、目を焼かれるような心地さえした。

宇宙ステーションから見た地球の夜景というのを、立香はテレビ番組で観たことがあった。彼女の出身国である日本の夜景は、宇宙から観測すると列島の大半が明るく光っているのだ。

立香は大変形した戦車の、目に毒とすら言えるような光り方に、ぼんやりとその映像を思い出していた。

「いいぞ、なかなか良く出来ている。少し明る過ぎるが、むしろお前にはそれくらいが丁度良いのだろうな。では試すか、サンタ後輩！  
匈奴フンヌのクリスマスを見せよう！」

「オーララ、ノツてきたなサンタ先輩！ クリスマスレースと行こうじゃねえか！」



聖夜の空を、二つの星が照らす。

二つの星は、あまりに対照的な光り方をしている。

さながら月と太陽の如く。

虹の流星二つが、夜空を駆け抜ける。

空中決戦。ナポレオンとアルテラサンタは、互いにデッドヒートを繰り広げていた。

アルテラサンタが従える羊の群勢が、その丸い身体を霧散させ、光を撒き散らす。爆発したかのように見えるが、実態は摩訶不思議なエネルギーの放出である。見た目以上の威力にナポレオンのソリは大きく揺れるが、体勢を整えてさらに速度を増す。

「主砲一番・二番、砲撃用意！」

ナポレオンが叫ぶと、先程から忙しく動いていた二つの砲塔が、羊の群勢に首を向ける。すぐに発射音が鳴り響き、目標であった羊の一端に命中する。羊は砲弾——赤いプレゼントボックスを喰らって地上に落ちていく。

「ああっ、なんて暴力的な……」

「ねえ、コレ本当に大丈夫なの？」

立香がやや呆れ気味に聞く。プレゼントボックス弾はかなり勢いが強い。つまりその分威力はあるということだが……

「プレゼントの中身は『受けた当人が望んだモノ』だ。欲しいモノは欲しいだけ、存分に楽しめる。サンタつてのは、望まれて在る者だからなア！」

「いや、威力の話」

「ん？ ああ、それは……まあ、やり過ぎちまう時もある。弾速をもう少し落として……いや、今はそんな場合じゃねえな！」

風より早く、羊の群勢が襲い来る。ナポレオンの戦車は止まることなく、確実に一騎ずつ撃墜していく。

「なあ、サンタ先輩！ 最後のレッスン、頼むぜ！」

「当然だ、サンタ後輩。先輩サンタとして、最後の仕事を果たそう」  
決着は近い。互いがその事実を認識していた。

「約束は壊さない。その孤独を粉碎する——」

天から来たる流星は、空に虹を架ける奇跡を見せる。

月天の牢に孤独あれど、冬の空に輝く星は、皆の孤独を照らせると信じて。

破壊を超えて新たな光を知った彼女が振るう、奇跡の権能。人呼んで聖夜現象。

『「聖夜の虹、軍神の剣」！』

七色の流星群は、一丸となってナポレオンの戦車に突撃する。

「上等だ。マスター、このまま突っ切るぞ！」

「了解……！ 令呪を以て命ずる！ 勝ちに行くよ、皇帝陛下！」

立香も覚悟を決めた。神代の暴威に飛び込むが如き蛮行、されどその足が止まることはない。令呪一面を消費して、戦車のスピードを爆発的に上昇させる。

「これが！ オレの！ サンタ道だッ！」

天雷の如き炸裂に飛び込んだ。目を焼かんばかりの光の嵐を、突き抜けるように疾駆する。

立香は固く目を瞑る。そして光が止み、再び目を開けた時には、勝敗は決していた。

黒煙を上げる戦車が、車体の電飾を爆発させて雪の大地に激突する。

それと同時に、煤けて黒い斑点を帯びた球体が、騎手と共に落ちてくる。

先に起き上がったのは……戦車の騎手、ナポレオンであった。



雪原は、煌びやかに飾り付けられたクリスマス仕様の部屋に戻った。



地面に突っ伏して目を覚まさないアルテラサンタの前に、立香とナポレオンが立っている。

寝息を立てている風にも見えたアルテラサンタだったが、突然凄まじい勢いで飛び起きた。

「ん……ハッ!? わ、私は、一体……」

「大丈夫、アルテラ?」

「おお、我がふわふわのマスター。そして……サンタ後輩だな?」  
「ああ」

アルテラサンタはナポレオンと立香に向けて交互に会釈する。先程までキャンディケインを振るっていた人物と同様の、穏やかな視線がナポレオンに向けられた。

「ナポレオン・ボナパルト。おまえがカルデアの四代目サンタ、ということだが……」

「おうよ。オレはやらなきゃならんことがある。そのためにここに戻ってきたのさ」

彼の使命。立香はそこが気になっていた。彼が自ら、サンタクロスになってまで果たす使命とは、何なのか?

「そういえば……ナポレオンはどうして、自分がサンタクロスになるうと思っただの?」

「簡単さ。サンタクロースはな、プレゼントを届けるんだよ。可能性の偶像、望まれて在る奇跡の具現。語源を遡れば聖ニコラウスにまで辿り着くが、かの聖者が何を思ってるのかはオレにも分からん。だが、少なくとも現代においてサンタってのは、プレゼントを願う者に、プレゼントを届ける存在だ。オレはこの塔の連中全員に、プレゼントを届けるために、サンタクロースになったのさ」

ナポレオンは意気揚々と語った。かつて国を統べた者として、責務を果たすことに関して他のサンタにも引けを取るまいと、彼は自負していた。

「じゃあ、アルテラサンタも何かを求めてたってこと?」

「……そうだな。今年のクリスマスも楽しみだった。いずれ来たる後輩を、しっかりと導ける先輩サンタクロースに、なってみたかった。

その心に嘘はない。彼は先代にあたる私に、後輩サンタとして向き合った。それはとても、あたたかい触れ合いだった」

アルテラサンタは噛み締めるように、己の心中を語り始める。

彼女は不安だった。先代サンタクローズとして、恥ずかしい真似は出来ないという義務感が、今回の事件に繋がった、と彼女は考えていた。

だが……救いもあった。彼女はこうして、ナポレオンとの激闘を通し、先輩として後輩を教導する役を、しっかりと果たすことが出来た。一度目とは異なり、光に身を包みながら、アルテラサンタは最後のメッセージを送る。カルデアへの退去の光だ。

「ありがとう、サンタ後輩……いや、ナポレオン・ボナパルト・サンタクローズ。今日という日を、おまえと共に在れたことが、私にとつては大切なプレゼントだ」

「それはこっちのセリフさ、誰よりも優しき願いを持った三代目。孤独を癒す星を願ったサンタ先輩。アンタの教えは決して忘れないさ」  
アルテラサンタはにこりと笑い、懐から付け髭を取り出す。

「では、最後の授業じゃ。さつきはああ言ったが、やはりあの戦車は光量が少し多すぎる。もう少し電飾を控えめにすると良い」

「了解。以後は気をつけるとしよう」

ナポレオンが返すと、満面に笑みを浮かべたまま、アルテラ・ザ・サン「タ」はカルデアへと帰っていった。

第一層の扉が独りでに開く。

カルデアの三代目サンタクローズ、その勇姿を見届けた二人は、次の層を目指して先に進む。

次なる関門は、人類最古の英雄王。

僅かな不安を胸に抱き、彼らは第二層へと急ぐのであった。  
つづく。

再走・第二層：Fairytale of Gilg  
amesh その1

英雄王ギルガメッシュ。

紀元前、中東のシュメル文明に端を発する英雄。半神半人の暴君であり、杉の森の怪物フワワを倒した者。朋友エルキドウの死を契機に不死を求め、その果てに国を治める賢王となった男。

立香はかの英雄王について仔細を完全に把握しているわけではないが、英雄王が制御の利かない恐ろしい英雄であることはよく知っていた。いつぞの秋……カルデアでは恒例行事となっていた『ネロ祭』を開催用の資金諸共裏から掻っ攫い、ニューヨークにて自らが主催の『バトル・イン・ニューヨーク2018』を開催した事件は記憶に新しい。

とかくそういった『財力にモノを言わせた策略』については手が早くまた力強い運営を行う人物である。逆説的に言えば、彼がクリスマスに欲するものがあるとすれば……プライスレスの価値を持つモノに他ならない。

石塔の階段を上りながら、立香とナポレオンはそう結論づけていた。



立香とナポレオンは、アルテラサンタの支配する第一層を越えて、第二層に辿り着こうとしていた。ちなみに先の戦闘で使用した戦車……もといソリは損傷が激しく、塔の外に運び出されたのち、野晒しにされている。ナポレオン曰く、修理はダ・ヴィンチに依頼するそうである。

立香が扉を開けると、以前来た時と変わらない、夜の祭壇が姿を見せる。辺りは煌々と篝火に照らされ、夜の風景を映し出しているがら、室内は明るく感じられた。

そしてその中央にはギルガメッシュが立っている。これも以前とは変わらない……というわけでもなかった。

「えーつと……賢王、もといゴージャスP？ どうしてここに？」  
立香が疑問を口にした。

祭壇の中央にいるギルガメツシユは、黄金の鎧を着ていない。紺のジャケットに灰色がかったジーンズを着用し、両手首には金のブレスレットを着け、金のネックレスが開襟した胸元から覗いている。全て高級ブランド品であり、それを自然に着こなしている姿は黄金の王と呼ぶに相応しい。手に持っているのは金色のタブレット端末。これも彼の私物にして魔術礼装の一種であるらしい。

この姿のギルガメツシユは、神の獣を打ち倒し、数々の冒険を行った英雄王ではない。不死の探索を経て成長を遂げ、国を治める賢王となったギルガメツシユである。

クラスは魔術師<sup>キャスター</sup>。そしてこの衣装を着た場合は専ら『ゴージャスP』と呼ばれる。PはPresident<sup>P</sup>のPだ。

賢王・ギルガメツシユ……もといゴージャスPは、手元のタブレット端末を弄びながら、ちらと視線を立香達の方に向けた。

「謁見を許す。こちらに来るがいい」

その言葉に突き動かされるように、立香達は自然と足を踏み出していた。五メートル程歩くと、賢王は無言で手を翳す。制止の合図であった。

「さて、コレが二度目というわけだが」

「そうだな」

「今度は、大丈夫……だと思っただけど……」

『二度目』という部分を殊更に強調するギルガメツシユ。根に持っているのだろうか。

「さて、クリスマス・イヴに至ってこの我が<sup>オレ</sup>が、何もせず指を咥えている暗君ではないというのは周知の事実。祭礼にあたっては臣民に特別の品を配るのも王の役割というものだ」

「へえ、アンタにしちゃ随分と殊勝じゃないか……さすが人類最古の英雄王は言うこと為すこと違っつてか」

「フ、言い回しは傲岸だが、クリスマス故特別に許す。話の続きだが、ニューヨークの闘技祭で想定以上の収入を得られたのでな、その資産

をクリスマス分に回すことも大いに可能であった。そこで、コレだ！」

ギルガメツシユは宝物庫から目録を取り出し、立香に投げ渡す。目録を開くと、そこには『極秘ファイル：ゴージャス・クリスマス計画』と題された、大規模なクリスマスプレゼントの配布プランが記されていた。

「ゴージャス？」

「クリスマス？」

「フハハハ、聞いて驚け。クリスマスプレゼントの大規模大量生産及び即日配達プラン、名付けてゴージャス・クリスマス計画！アマゾン・ドットコムとライオンヘッドを多額のQPで買収し、実行は秒読みに入っている。クリスマスプレゼントとあつては、要望に応じた品を確実に届けなければならん。よつて生産プラン明確化のために要望リストを製作し、署名を募つてるところだ。どうだ、貴様らにも恵んでやろう。案ずるな。こと祭日にあつて、金と資材には糸目をつけぬ。我の寛大さに震えるがいい」

計画の全容を聞いた瞬間、立香とナポレオンは一つの理解に至つた。

『なるほど、さては根に持つているな？』

要望に応じたクリスマスプレゼントの配達サービス、それ自体は確かに合理的と言えよう。しかし、サンタクロースにとって何より重要なある部分が、決定的に損なわれる。

「なあ、無礼を承知で尋ねるが」

「む？」

「アンタ、サンタクロースって知つてるか？」

「フツ、蒙昧極まる問いだな。だが赦す。サンタクロースとはな、要望に応じたプレゼントを配る機構システムそのものだ。ヒトが神に求めた役割の名残とも言えるだろうな」

「……ソイツは、神様の仕事だ。サンタの役じゃねえ」

「吼えたな、雑種。では聞かせよ。サンタクロースとは何だ？」

「決まつてんだろ、『夢を与える幻想』だ！　そもそもサンタクロース

はな、正体をバラしたら成立しねえんだよ！ 商業主義に則ったクリスマスプレゼントも良からうさ。だが、それは無垢なる少年少女の夢を奪うぞ！……逆に聞こう、英雄王！ その姿は何だ？」

間髪を容れず、根本的な疑問に目を向ける。そもそも、この塔に閉じ込められたのは弓兵アーチャーのギルガメツシユだったはず。しかし今のギルガメツシユの姿は、魔術師キャスタークラス時に披露したモノである。クラスの境界が多少曖昧な英雄王といえど、この変身にはワケがあるはず……ナポレオンはそう捉えた。

果たしてギルガメツシユの答えは、至極単純なものであった。

「それこそ愚問よ。我は成長オレした。プレゼントを貰えなかったとて、駄々をこねる時期なぞとうに終わったわ！ それ故の賢王の装いと知るがいい」

「あの、英雄王」

一つの確信を得た立香が畳み掛ける。聞けば確実に、英雄王が真の姿を現すであろう、禁断とも言える質問。

「何だ」

「サンタクローズになろうとしたのは、どうして？」

「知れたこと。我がサンタオレとなれば、全ての者に等しく褒賞を授けるコトも不可能ではないからだ」

「……貴方も欲しがっていたのに？」

彼とて、欲しがっていたはずだ。

届かぬ星と知りながら、尊きモノとして見据えた彼女と肩を並べる奇跡。

聖夜の奇跡に不可能は無い。御伽噺と知っていながらも、兎戯にもならぬ希望と断じながらも、英雄王は信じたのでは？

賢王は目を伏せる。僅かな間を置いて顔を上げると、黄金に輝く髪をかき上げる。宝物庫を展開し、黄金の鎧を着込んだ。その瞳は爛々と輝き、普段通りの伶俐さを湛えた笑みを浮かべると、次の瞬間には呵々大笑し始めた。

「ふ、フフフハハハ！ ハハハハハハハハ!! ク、フフハハハハハ!! 成る程、これが笑わずにいられるか！ まさかこともあるように貴様ら

雑種が、この我の蒙を啓くだど？　だが良い！　この時分に微睡むよりは余程マシというものよ！　特別に赦すぞ雑種！」

普段の英雄王が、戻ってきた。アーチャー・ギルガメツシュ、ここに再びの降臨である。

ひとしきり笑い終えると、普段よりも活力を感じさせる視線と声を、立香達に向ける。

「だが、それはそれとしてよくも謀ってくれたな？　我がこの塔に縛り付けられていると知った上での狼藉でなければ、直ぐにでも処断していたところだが……」

「塔の主……あのルーラーの視線にやられたリリイを思い出してな。アンタの言動が腑に落ちなかったのも、つまりは塔の影響だったと。アルテラサンタはまだマシな方だったが、それは要するにアンタを縛り付ける分にリソースを多大に割いたってコトなんだろうさ」

立香も頷く。言われてみれば不自然極まる話だった。英雄王ともあろう者が、クリスマスに無償でプレゼントを配るなどあり得ない。仮にそのような事態になったとしても、彼ならばその倍のリターンを何らかの方法で手に入れる策とセットで行うに決まっていたのだ。高ランクの黄金律持ちは伊達ではない。

つまり、ギルガメツシュの不可解な言動の数々は、何らかの外部からの影響によって発せられたものということになる。

「なかなかの座興よ、前戯としては申し分無い！　さあ本番だ。褒賞を渡すがいい。あらゆる全てを飲み込み、我のモノとしてくれよう。存分にこちらも返すぞ？　サンタクロースの義務とやら、闘争の中で果たしてみせよ。働き次第では、こちらとて原初の地獄を見せるもやぶさかではない」

正気に戻ったとて、塔自体の道筋は変わらない。英雄王を倒さねば先に進むことも、ジャンヌ・リリイを助けることも、クリスマスを安全に迎えることも出来ない。であれば。

「貫き、砕いて、押し通るまでだな。マスター、相手は英雄王だ。フル・スロットルで突き抜けるぞ」

「了解、戦闘配置について！」

「興が乗ったわ。頭を垂れよ……裁定の時だ！」  
相対するは英雄王、立ち向かうはカルデア一行。  
原初の財宝、地獄の波濤。  
切り抜けた先に、何を見る。  
つづく。



再走・第二層：Fairytale of Gilg  
am es h その2

「手始めに我の財宝を開帳しよう。刃の波濤を切り抜ける勇を見せるがいい」

ギルガメツシユは宝具『王の財宝』ゲート・オブ・バビロン……黄金に輝く次元の孔を無数に展開し、剣を構えたナポレオンに照準を向けた。ナポレオンの持つ剣、その虹色の刀身が、祭壇の篝火を反射して仄かに煌めく。

一瞬の後、爆発めいた衝撃と共にナポレオンが飛び出す。セイバークラスとなったことで全体的な身体能力が強化されたのか、その踏み込みは財宝の射出より遙かに速い。宝物庫より放たれた刃の数々は、ナポレオンに掠ることもなく地面に突き刺さった。

宝物庫から黄金の剣を袈裟懸けに振り抜き、ギルガメツシユとナポレオンは鏝迫り合いの格好となる。

「ほう、剣技の心得もあつたとはな……なかなか骨のある兵よ。剣騎つわものの霊基となつただけの事はあるう。だが——」

足元に出現した孔から、名も知らぬ魔剣の刃が覗く。それを確認したナポレオンは飛び退き、上空から襲い来る『本命』……雨の如く降り注ぐ宝剣の数々を切り払った。

隙を生じぬ二手の攻勢。仕掛け時を的確に見計らう技量と、強力無比な宝具の数々。平時とは明らかに異なる戦闘スタイルだ。それは怒りによって冷静さを欠いていた一度目とは違い、最初から『本気』を出している状態に近い。切り抜けるのは至難の業だろう。マスターである立香が、現状狙われていないのは幸いか。あるいは、そもそも狙う必要すら無いのか。

ともかく、立香が狙われない限りは勝機がある。第二宝具・聖剣ジユワユーズの真名解放という切り札が、ナポレオンには存在するからだ。

不意を突くように放たれるギルガメツシユの剣戟をいなしながら、ナポレオンは次の手を模索していた。

「良い。この我を相手にこれだけ保たせたその技量、戯れに興じる分には申し分ない。上級宝具の一つや二つは抜くに値するであろうな……手始めにコレはどうだ？」

ギルガメツシュが『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』から抜き放ったのは、巨大な突撃槍のような形状の剣であった。数本の小剣が円を形成するように連なったこの大剣は、高速回転によって驚異的な破壊力を発揮する機構を備えている。

刃をドリルめいて回転させながら、ナポレオンめがけて突き入れる。

「オーララ……見るからに危険な形状、ゴキゲンじゃねえか」

「ハ、神代の遺物とは言え道具は道具。使わねば持ち腐れるのでな、特別にお披露目というヤツよ。聖夜に相応の褒美であろう？ 存分に拝領するがいい」

茶目っ気というには物騒な、ドリルじみた回転を見せる刃をギルガメツシュが右手で突き入れる。ナポレオンは間一髪で横っ飛びに避け、反撃で回転剣を叩き落とす。後ろに廻した左腕から迫る斧の斬撃を弾き、次いで投げつけられた黄金の剣も斬り払って軌道を逸らす。

元が弓兵アーチャーであったとは思えぬ程の鮮やかで正確な剣技に、後方から支援の機を図る立香は感嘆の声を漏らした。

とはいえ、状況としては千日手に成らざるを得なかったのも事実である。ナポレオンの剣技は防勢と反撃に特化しているが、襲い来る宝具の数々を払いのけるのみに留まり、決定打を叩き込むには至らない。

ギルガメツシュの財宝は強力だが、その攻勢は悉くナポレオンに防がれる。一対一の戦闘技術においてはナポレオンが上回る形となり、宝具の威力を発揮出来てはいない状態である。

双方、共に必殺の切り札を使う必要がある。

状況打開の一手は、二人の宝具が握る状態となっていた。

「(マスター、令呪は幾つ残ってる?)」

ナポレオンが立香に念話で問いかける。

「(あと二画)」

「(その二画を全て貰う。魔力リソースとして使わせて貰うぜ。宝具解放だ)」

「(了解) ……令呪二画を以て命ずる。セイバー、ナポレオン・ボナパルト……第二宝具を解放せよ!」

立香の右手の甲にある令呪が赤く光を灯し、掻き消える。

その様を見ていた英雄王は、ニヤリと笑い宝物庫に手を伸ばす。

「ふむ、力量に疑問の余地は無し。では宝物庫の鍵を開ける。これより先の地獄、生き延びてみせるがいい!」

引き抜かれたのは、赤く光る文様を備える、黒い円筒のような刃を持つナニカ。剣と呼ぶには異質過ぎるソレは、『剣』という概念が生まれる以前に造られたものであり、便宜上刀剣として扱われているに過ぎない神の遺物である。

黒い円筒は三段に分かれ、それぞれが別々に駆動し回転する。回転が増す毎に、地面が……いや、空間そのものが悲鳴を上げるように引き攣り、鳴動する。刃の回転が風を巻き込み、赤き暴風の渦となって剣を覆い始めた。

この剣こそは、英雄王ギルガメツシュただ一人にのみ許された、唯一にして至高の宝具。無銘にして最強とも言うべき、原初の地獄の具現。

ギルガメツシュはこの剣を、乖離剣エアと呼ぶ。

バビロニア・シュメル神話圏における知恵の神エアの名を冠した剣。

創世を知り、創世以前の地獄を語るモノ。

「裁きの時だ。天地は分かれ無は開闢を言祝ぐ。世界を裂くは我が乖離剣」

死の風が荒れ狂い、虚空にヒビが入る。石塔の崩落も御構い無しとばかりに出力を高めた乖離剣を、英雄王は自身の真上に向ける。

この状況に、ただ指を咥えるだけの生命はいない。

逃げるか、あるいは剣を取り立ち向かうか。

「一夜一時の奇跡のため、此処に我らは虹を架ける!」

ナポレオンが構えるは聖剣ジュワユーズのレプリカ。シャルル

マーニユ伝説に伝わる極彩の剣。その刃を白く輝かせ、背後に虹の七色に対応した、七本の剣が出現する。

「最も新しき伝説の聖剣よ、闇夜を照らし光を示せ！」

伝説の聖剣の模造品。神秘も伝説も一切持たないただの模造品は、虹を放つ可能性の男の手により、新たな伝説……最新の聖剣として、これより人類史に刻まれる。

闇を照らす先駆けの光。虹の流星は一夜の幻でありながら、記憶の中に光を残す。

両者が剣を振り上げる。

一切を吹き飛ばす地獄の暴風、対するは空駆ける七つの星。

その名は――

「死して拝せよ……『天地乖離す開闢の星』！」

「『未来を示せ、遍く空を走る七つの流星』！」

世界を切り裂く風が吹き荒ぶ。鮮血の如き色をした風が、突き進む七つの光を捉えた。

威力では乖離剣の方が上だ。伝承の存在しない剣に劣る道理はない。

しかし、ギルガメツシュは己が見た光景に目を剥くことになる。

「競り合う、だと……？」

ナポレオンが繰り出した七つの光。それは彼が出現させた七つの剣だ。それ自体の威力は、いくら聖剣の名を冠するとはいえ、乖離剣に勝るものでは断じてない。

では……何故乖離剣を真正面から迎え撃つことが出来る？

その疑問に答えを返したのは、他ならぬナポレオンであった。

「当然だ！ この剣は願いによって鍛えられ、この身は願いを叶えるために空を駆ける！ その願いは誰のモノか……」

「己の後ろを往く者達、遍く臣民の願いだと……だがそれだけで乖離剣に対抗なぞ出来るものかア！」

「そうさな、だが……人民の願いを受けたこの剣なればこそ、世界を破壊するモノに対する防御が働く！ 対肅清防御、とまでは行かねえが……アンタを相手取るに不足は無えぜ、英雄王ツ！」

七つの光は収束し、虹色の光となって地獄を駆ける。その光を追って、ナポレオンが駆け出し、光と一つになってギルガメツシュに向かっていく。だがあと一步というところで英雄王には届かない。一步を届かせる何かがあれば……ナポレオンが微かにそう思い始めた瞬間。

『瞬間強化』、届けエーツ!!』

真正正銘、最後の一手。ナポレオンの背中を押ししたのは、後ろに控えていた立香の援護だった。

瞬間的な魔力増幅によつて、攻撃の威力を増加させるだけの単純な強化。しかし単純故にその一手は強力であった。

「貰ったぜ、英雄王オーツ!!」

逆風に立ち向かうように、刃を突き入れる。

決定的な一撃が入る直前の一瞬、ナポレオンはギルガメツシュの表情を見た。

歯を覗かせ、満足げに笑みを見せた英雄王。その表情には一点の曇りも無い。

光は、地獄を超えて黄金の王を突き抜けた。



勝負は終わった。ナポレオンは膝をつき、立香の礼装によつて回復処置を受けていた。

その背後に、ギルガメツシュは立っている。

輪郭が薄れ始め、淡い光を放っている。カルデアへの帰還の光、特異点からの退去であった。

「沙汰を言い渡す」

簡潔に、立香達の方を向かないまま、ギルガメツシュは言った。

戦いを通して、彼らのサンタクローズ稼業に対する裁定を言い渡すというのである。

「及第点だ。初めてにしては良くやったものよ。我の望むモノは何一つ手に入らなかったが、埋め合わせとしては上々というところよな」  
「お褒めに預かり光栄ッてな。いやしかし、悪かった。ロクなプレゼントも用意出来なんだが……先輩からもお叱りが来るか……?」

「当然よ。我の求めるプレゼントが貴様ら雑種に用意出来るなど、最初から期待はしておらぬわ」

「なっ……!?!」

立香とナポレオンが瞠目する。驚愕する二人をよそに、英雄王は最後の言葉を贈った。

「つまりはな、サンタクローズとしての気概を問うているのだ。欲する貢ぎ物が用意出来ない場合、何らかの埋め合わせを行うのが道理であろう。代替品などで満足する我ではないが、それはそれとして何も無しではあまりにつまらない」

「わざわざ戦ったのもそれが理由？」

「その通りだ。塔に縛られていたのは事実だが、解放された後に脱出を図ることも可能ではあった。だが……たまの休日とあつては、羽目を外して宴に興じるものだからな！」

言い終えて、ギルガメツシュはようやく二人に向き直った。姿はほぼ曖昧になっていたが、射貫くような視線は健在だ。

「改めて言うが——此度の働き、大義であつた。見事この事件を解決してみせよ」

そう言つて、黄金の英雄王は完全にこの世界から退去した。

「あの英雄王に、褒められた……」

嵐の後の静かな一時。

だが、休む暇は無い。第二の王を超えた先には、最後の王……  
モンテ・クリスト伯  
巖窟王が待っている。

ナポレオンは第二層に別れを告げるべく、おもむろに立ち上がり、第三層へと続く扉を開けた。  
つづく。

## 再走・第三層：怒れる王モンテ・クリスト

第三層の扉が開かれる。

そこは既に、月光に照らされる砂浜と化していた。

物理法則すら超越した変容は、いつ見てもそう慣れるものではない。藤丸立香は目眩のするような状況を見据え、夜の砂浜に佇む一人の男を見ていた。

幽鬼めいた男。黒づくめの衣装からは、青白い肌が覗く。重苦しい雰囲気を漂わせるその男は、寄せては返す波の音を聴きながら、一面に広がる海を見ていた。

アヴェンジャー、モンテ・クリスト伯 巖窟王が立っている。

「よう。メリークリスマスだな、巖窟王」

「……なんだ、その装いは。かのナポレオンともあろう者が、まるで道化だな」

巖窟王の表情に笑みは無い。だが、虎めいた黄金の瞳には、確かな輝きが宿っている。月光が照らす夜の砂浜で、三人は厳かに対峙していた。

「ま、見ての通り出直してきたってワケだ」

「英雄王とアルテラが、カルデアに帰還したのはオレも把握している。そしてその霊基の変質……酷く歪だが、セイバー 剣騎として体裁は整えたようだな。未恐ろしいと言うべきか」

マントを大袈裟に翻し、巖窟王はナポレオン達の方へ向き直る。

後ろに右手を回し、巖窟王は虚空に向けて黒い炎を放った。炎は一直線に進み、何も無い場所に衝突して爆発を起こす。爆煙が消えると、爆発地点に縦に長い長方形の穴が空き、そこから階段が覗いていた。

「なっ!？」

「オーララ……英雄王ですら破れなかった結界を破るだど!？」

「この空間や石塔は確かに、あの男……フリードリヒ・ニーチェが宝具として所有する固有結界だが、いわゆる魔術的なソレとは根本的に在り方が異なると言って差し支えない。ただ精神によってのみ存在し、

侵入した者の精神を映し出す鏡。ヤツ自身の強靱かつ他者と隔絶した精神性が、他者を観測し、他者の存在によって成立する固有結界となつたワケだ」

「まさか……心持ち一つでどうとでもなる、と？ それだけとは思えんが」

「英雄王は実際、この塔に縛り付けられながらも、本質を理解していたのだろうよ。ニーチェは神秘を否定する側の人間だ。神秘により近いモノ程、この結界には強く縛られる。幼き聖女にしてみせたように、英雄王をより強く縛り付け、物理的な手段で破られぬように防衛を固めた。この件においてニーチェが求めたのは、精神的な克己だったからな」

「なるほど」

立香は手を叩いた。英雄王の様子が何かと奇妙だった点、それに対して巖窟王の言動は平時と大差なかった点。その二点を比較し、彼女なりに納得したのだ。

塔に囚われていたアルテラとギルガメッシュは『神性』をスキルとして所持している。神に近い者達が持つスキル、それが『神性』だ。神秘を縛り、零落させる能力を、ニーチェが持つというのなら、たとえ強力なサーヴァントであるとはいえ、神性を持つ二人が縛られないうという道理は無い。

ジャンヌ・オルタ・サンタ・リリイは出自こそ特殊極まるが、大元になつているのは、後世に『聖人』として認められ、神からの啓示を賜つたジャンヌ・ダルクである。

そして、彼女を一つの存在として規定する概念はサンタクロース。サンタクロースの起源は、紀元三世紀の聖人ニコラウスにまで遡るとされる。

つまり、特殊な経緯で生まれたとはいえ、本質的にはジャンヌ・リリイも神秘の側に立つサーヴァントと言えるだろう。

十九世紀フランスの作家アレクサンドル・デュマ・ペールが産み落とした、復讐の神話。『モンテ・クリスト伯』と題された小説の主人公、あるいはその原型たる人物。



無実の罪にて地獄めいた牢に繋がれ、十四年の時を経て、名を変え身分を偽り悪鬼となって帰参し、尋常ならざる精神力にて復讐を果たすために走った男。

たとえその出自に幾らかの神秘が混じろうとも、彼の本質はそこにはない。

十四年の地獄を生き延び、絶対の応報者として舞い戻った、彼の超人的精神力。『巖窟王』の名を冠するに相応しい、鋼鉄の心こそが、彼を復讐神話の英雄たらしめたのである。

「……つまり、出ようと思えばここから出ることも出来たってこと？」  
「まあ聞け。本題はここからだ」

立香は溜め息混じりに言った。物理的な破壊力ではなく、精神力の話をしているのだとすれば、確かに巖窟王ほどの英霊であれば、単独で脱出することも不可能ではなかっただろう。

「アルテラと英雄王を解放したということは、お前達が『新たなサンタクロースを輩出する』という形で、この塔に再び臨んだように、彼奴らもまた同様に成し遂げたということだ。ここを出す方法は単純だ。己を見つめ直し、そして『答えを得る』こと。アルテラは自らの役割を見出し、新たなサンタクロースを導いた。英雄王は裁定者として、サンタクロースとしての気概を問うことで、この事件における役割を果たした。どちらもお前達の存在無くしては、成し遂げられなかっただろうな。だが……オレは違う。オレの役割はもう終わっている。そして答えも出ている。今のお前達ならば、先に進み、全てを終わらせられるだろう」

巖窟王は言葉を切った。彼の役割とは即ち、この階層で立香達を見定めること。ニーチェと相對するに値するかどうかを、彼が最後に見極める。それが己の役割であると述べた。

しかし。  
「待ちな」

当代のサンタクロースが、静かに剣を構える。

「オレ達の役割は、まだ終わっちゃいねえのさ」

立香達の役割、それは特異点の修正とジャンヌ・リリーの奪還。だ

が今回はそれだけではない。

「オレとお前の因果は、まだ終わっちゃいねえだろ」

「待ってナポレオン、どういう——」

問い質すその言葉が最後まで紡がれることはない。ナポレオンが無言で制止したからだ。

「確かに、今の言い分ならお前さんはお役御免ツて扱いになるだろうよ。だがな、オレ達はサンタクローズだ」

「——ほう、そう来たか」

巖窟王の目に光が灯る。冷厳な眼光は色を変え、寧猛な肉食獣のように煌めく。

「ああ。クリスマスプレゼントは、キツチリ受け取って貰うぜ。生前、オレ達が果たせなかった因果を、ここで一度精算していこうじゃねえか」

ナポレオンと巖窟王の因果。

無実の罪にて獄に繋がれたエドモン・ダンテスという一人の男を、ナポレオンは救うことが出来なかった。その結果、エドモン・ダンテスは誰もが知る超絶<sup>モンテ・クリスト伯</sup>の復讐鬼に成り果てたのである。

救えなかった後悔と、救われなかった憎悪が共にある以上、いずれ果たされるべき宿業であった。

「ク、ククク……フハハハハハ!!」

復讐者は哄笑する。

役者が揃い、舞台が整ったことを彼は完全に理解していた。

果たされざる復讐、在り得ざる未来を前に、巖窟王は至上の歓喜を得る。

「良かろう、ならば我が名を聞くがいい……我が名はエドモン・ダンテス。恩讐の彼方より来たりて、貴様に応報する者だッ！」

「これで良いんだね、皇帝陛下」

立香がやや呆れ気味に言った。不要な戦いだ。最上層への扉は開かれている。だが、叩きつけたハンカチを今更拾い直すような真似をするのも、野暮というものだろう。立香はそういった浪漫に一定の理解があった。

「ああ。いずれケジメはつけにやならんかったからな。コイツも聖夜の奇跡ってコトで……付き合わせちまって悪いが、始めるぜマスメートルター！

エドモン・ダンテス

巖窟王の新たなる復讐劇が、ここに幕を開ける。



先手は巖窟王が打つ。黒い炎を連続で放ち、ナポレオンの足を止め、に掛かった。ナポレオンは聖剣で炎を斬り払い、全速力で巖窟王に迫る。

以前はジャンヌ・リリイが前衛に出ていたため、後方からの支援を主な仕事としていたが、今回のナポレオンは単騎。強力な遠隔兵装も持たないため、自ら前に出て攻めなければならぬ。

肉薄して数手打ち合う両者。攻撃を交え、互いに実力を押し量っている。

上段から斬り掛かったナポレオンの斬撃を、巖窟王が刃を掴んで逸らし、反撃としてナポレオンの顔面に左拳を喰らわせる。よろめいたナポレオンに追撃の黒炎が襲いかかり、直撃した。

立香は両者の戦闘を固唾を呑んで観察していた。令呪は全て消費してしまったため、礼装に仕込まれた三つの術式のみが、彼女に可能な援護となる。その術式も、恐らく使うならばそれぞれ一回が限度であろう。巖窟王は直接戦闘において強力なサーヴァントであり、第一宝具を失っているナポレオンの事情を鑑みれば長期戦は望ましくない。

故に彼女は、最善のタイミングで礼装の術式を使用するために、ナポレオンと巖窟王の戦いを見ておく必要があった。

ナポレオンが剣を振り抜き、巖窟王に一太刀浴びせる。巖窟王は高速で飛び回り、すれ違いざまに連続で斬りつける。搔撃は虎の爪牙が如く、ナポレオンの全身を引き裂きに掛かる。剥き出しの殺意と怨念が、刃となってナポレオンを抉る。

続けざまに放たれた巖窟王の回し蹴りを左手で受けたナポレオンは、聖剣を逆手に持ち替え、剣の柄頭を巖窟王の顔面に叩き込む。至近距離ではセイバーとしての精妙な剣技を發揮していくと判断して

のことだ。大きくよろめいた隙に力任せの前蹴りを食らわせて距離を離れた。

「来な！　まだ勝負は始まったばかりだぜ」

「ハ、言ってくれるな皇帝陛下……この程度で終わっては、貴様とて癪だろう」

「そうさ……互いに全霊を見せようじゃねえか！」

剣戟の音が響き、赤と黒の火花が散る。

数十手打ち合つてなお、両者の攻勢に瓦解の色は無い。実力は拮抗し、戦況は千日手に陥りつつあった。

埒が明かぬと悟つてか、巖窟王が距離を離れた。虎めいた双眸が鈍く光る。

「我が名は巖窟王！モンテ・クリスト——その身に刻み込め——我が往くは怨讐の彼方……『アンフェル・シャトー・ディフ虎よ、煌々と燃え盛れ』！」

巖窟王の姿が目前より掻き消える。次の瞬間にはナポレオンの背後を取り、強烈な一撃を入れていた。血を撒き散らしながらナポレオンが前方に吹き飛ばされると、その方向に先回りして更なる一撃を見舞う。

「オーララ、予想以上だな、コイツは……！」

「クハハハハ！　是なるは我が憎悪、我が道程、我が真髄！　貴様であれど容赦なく、オレは虎の爪牙で刻むまで！」

瞬間移動に匹敵する速度で、虎の如き者が爪痕を刻む。地獄をも超越した人間の精神の為せる業。

胸に飛び蹴りを喰らい、地面に叩きつけられるナポレオン。起き上がる暇など与えずに、巖窟王は呪詛の炎を放つ。ナポレオンは全身を黒く焦がされ、満身創痍に陥った。

「やるじゃ、ねえか……」

装束を焼かれ、全身を裂かれてなお、ナポレオンは立ち上がる。立香は『応急処置』の術式を発動して、彼の傷を癒した。残る術式は二つ。『応急処置』の再充填までは待てない。

「このオレは貴様の意志を絶つ者、復讐の悪鬼として今此処に在る。ならば徹底せねばなるまい。呪詛を叩きつけ、弾劾し、やがては破滅

に追い遣る。救われざる者、貴様への怨念を滾らせる全ての魂をも糧として！」

「ならば果たしてみせろ！ その怒り、嘆き、絶望の全てをオレにぶつけろ！ 全て踏破してやるさ、このオレがなッ！」

再び両者が距離を詰める。ナポレオンの突きを巖窟王が刃を掴んで強引に止め、至近距離で雷火が迸る。その身を焦がしながらも、ナポレオンは巖窟王の顔面を引き寄せて頭突きを見舞った。ナポレオンは掴まれたままの剣を、巖窟王諸共全力で投げ上げる。体勢を崩した巖窟王に向かって跳躍の後、渾身の拳打を叩き込む。

浜辺に聖剣が突き刺さる。後ろに控えた立香は、剣を両手で投げてナポレオンに渡した。巖窟王が空中機動で迫るが、聖剣を取り戻したナポレオンは立香の術式『緊急回避』の援護を受けて無傷で着地する。

「そこか……！」

着地の隙を狙って、巖窟王が黒炎を放った。ナポレオンの背後には立香が控える。回避すれば彼女が直撃を喰らうだろう。

「(マズったか、背後には立香が……いや、まだ策はある！) マスター、最後の術式を頼む！」

「了解！ 『瞬間強化』！」

立香が最後の術式『瞬間強化』を発動した。虹色の光を纏う聖剣を、全力で巖窟王に向けて投げる。黒炎は霧散し、巖窟王の左腕を斬り飛ばして聖剣は遙か彼方へと飛んでいった。

巖窟王が着地し、間合いを詰めて丸腰のナポレオンと組み合う。左腕が無くなったとしても、彼の攻勢は揺るがない。呪いと怨念を叩きつけるが如く、一瞬の内に連続攻撃を仕掛ける。

もはや双方共に満身創痍である。それでも二つの魂は、ただ一つの結末を求める。

即ち、因縁の決着を。

「貴様の全てを振じ伏せ、オレは果たされざる復讐を果たす……！」  
たとえ有り得ざる因果であっても、オレは——」

「そうさ……果たせなかつた後悔はオレにもある。マルセイユの船乗りであったハズのオマエを、オレは見殺しにした！ 巖窟王を産み落

としたこの世の悪意、その一つとしてオレは……エドモン・ダンテス！ オマエと向き合おう！ たとえ遅きに失したとしても、この奇跡が赦されるのならば！」

血を吐くような絶叫。救われなかった者と、救わなかった者。遅すぎた因縁の終着は、奇跡の名を借りて果たされる。

何故に我は救われぬ。何故に我は救わざるか。憎悪と悔恨、共に行き着く先は憤怒。世の不条理に怒り、反逆する運命。その終わりが近づいている。

乾坤一擲、最後の一撃は互いの拳。怒りを乗せた鉄拳が、両者の顔を捉える。

脳を打ち鳴らす破壊の響き。一瞬の後、一人が膝について崩れ落ちる。

もう一人は遙か後方に突き立った聖剣を取りに向かう。その足取りは重いが、彼の表情に暗いものはない。

何かに納得し、答えを得た者の顔であった。



「……い……陛下……陛下！ 起きてー！」

「おおぅ!? んあ、どうしたマスター? ……あ、いや、皆まで言わんでも分かる。コイツは……オレの負けか」

立香に揺り起こされて、ナポレオンは意識を取り戻す。文字通りに全てを賭けた一戦に、彼は敗北したのである。周囲はかつて第三層に初めて来た時と同じく、仄暗い牢獄の様相を呈していた。

ナポレオンは自分の側に立て掛けられた自分の得物……聖剣ジュウユーズのレプリカに気づいた。

「いや、そうでもない。オレに一時の勝利すら齎した貴様もまた、この場においては勝者と言って差し支えあるまいよ」

暗闇から声が響く。青い炎と共に巖窟王が現れた。その左腕は失われたままだ。しかしその身体は淡い光に包まれ、輪郭が薄れている。退去の光。彼もまたカルデアに送還されるのだ。

「見事、と言っておくべきか。かつては神の領分であった奇跡を、貴様はこうして成し遂げた。かつてエドモン・ダンテスであった男は、

モシテ・クリスト伯  
巖窟王としてここに一つの復讐を成した。その筋書きを書いたのは他ならぬ貴様だが、ともかく『聖夜の奇跡』の名を借りて、オレは生前にすら成し得なかつた復讐を果たしたわけだ」

巖窟王は淡々と結論を述べる。

地獄より還つた復讐者は、かつての生においてすら果たされぬ復讐を成した。『それこそが、お前の言う奇跡だったのだ』と、巖窟王は語つたのである。

「出会つた以上は、いずれオレ達の因果にはケリをつけにやらなかつただろう。そしてオレも同様に、お前と向き合わなければならなかつた。生前に未練があるのはオレも同じだからな」

巖窟王が哄笑する。人理に刻まれた英霊である以上、二人とも次の召喚にこの記憶を、記録を持ち越すことはないだろう。それでも、彼らにとつては確かに意味のある行いだったのだ。当事者であつた二人が、信じ続ける限り。

「じゃあ行くぜ。しばらくの別れだな。いずれ再び、相見える時まで」  
「今度は、カルデアでね」

ナポレオンが立ち上がり、剣を腰に取つて進み始める。立香が後を追つて歩き出し、巖窟王を背にして扉に向かう。

「斯くして応報は果たされ、奇跡は此処に成つた。進め、新しき聖者よ！ 決して己が道を見失うな！」

巖窟王が櫂を飛ばす。それはこれより先に待つ最後の戦いに向けた助言でもあつた。

ナポレオンが第三層の扉に手を掛けたその時、最後の言葉が強く響く。

「……改めて再会を望むか。ならばオレはこう言うしかあるまい——  
『待て、しかして希望せよ』と——」

巖窟王は光と共に、石塔から去つていった。



最上層へ登る道中、立香はナポレオンに尋ねる。

塔の主、ニーチェが求めた『答え』とは何であつたか、と。

彼は最後に『答えを抱き、再び私の下に来るがいい』と言つた。立

香の中では、その答えが未だに漠然とした形でしか固まっていない。「オレとお前が抱く答えは違うものになるだろう。だが、考え続けることにこそ意味があるってものさ。悩んでもいい。その時間は決して、無駄になんかならねえよ」

ナポレオンが励ました。彼はこの騒動について、彼なりの答えを既に見出していたようだ。

やがて二人は、最上層の扉に辿り着く。

立香が前に出て、扉に手を掛ける。力を入れて引くと、重苦しい音を立てて扉が開く。

最後の戦いが、始まろうとしていた。  
つづく。



## 再走・最上層：暗夜の果てに

最上層の扉が開く。内装も広さも以前と全く変わらない。ランプの置かれた机、壁に掛けられたランプ、一つ違いがあるとすれば……机に座っているのは、塔の主ではなくジャンヌ・オルタ・サンタ・リイであるという点のみだ。

部屋の中心には、塔の主たる男……裁定者ルイラーのサーヴァント、フリードリヒ・ニーチエが立っていた。

服装に変化はなく、彼が持つ超然とした雰囲気は全く失われていなかった。白目と黒目が反転したような、深淵を思わせる瞳が、立香達の方を向いた。

「久しいな、カルデアのマスター。そして……当代のサンタクロースとなった者。初代フランス皇帝、ナポレオン・ボナパルト」

「せいぜい三日ぶりだがな、フリードリヒ・ニーチエ」

「時間はさしたる問題ではないが……よく間に合わせた。クリスマス・イヴ、この日こそ我々の決着には相応しかろう。『Frohe Weihnachten』と言わせて貰おう」

些かの揺らぎもなく、裁定者は淡々と応じた。億劫げにも聞こえる、低く重苦しい声色。立香は彼の一挙一動が、不自然かつ超越的な何かを孕んでいるように見えた。

「此処に囚われた『三人の王』を、君達は正しく解き放った。その労力に報いるとしよう。最初にここに来た時には開示しなかった情報も含めて、全てを明かすと宣言する。具体的には……カルデアのマスター、君がかつて行った三つの質問に回答させてもらおう」



では始めるとしよう。時間には余裕がある。

質問その一。『三人の王』の選定基準とは何であったか？

『三人の王』……アルテラ・ザ・サン〔タ〕、ギルガメッシュ、モント・クリスト伯巖窟王。なぜ彼ら三人が『三人の王』として選ばれたのか……それは彼らが本質的に持つ『孤独』の性質に由来するものだ。

英霊アルテラ、その起源は遊牧民族たるフン族の王アッティラに遡

る。しかし彼女は生前より『他者より隔絶した、何らかの強大な力』を持つていた。英霊として再現されたアルテラはこの力を持つて顕現するワケだが、それ故に孤独であったと言えるだろう。神性に程近い、人間世界とは異なる起源の力、そして一民族の王という立場こそ、英霊アルテラが持つ『孤独』の出自であると、私は考えた。

サンタクローズになろうとそれは変わらぬ。サーヴァントのクラスは、英霊の在り方を強調し、写し出すモノだが、『孤独に寄り添う』というアルテラサンタの在り方は……英霊アルテラが持つ孤独を、同時により強く表したとも言えるだろう。

英霊ギルガメッシュ。半神半人、太古の英雄王。天に近き者として、人類を見定める裁定者。故にその在り方は孤高でなくてはならない。彼は比較的分かりやすい方だったな。人と共に生きる……人の世を人であるがままに、人に寄り添って生きる賢王ではなく、孤高の存在、天より人類を見定める英雄王の側面が、今回の件においては相応しいというワケだ。

英霊巖窟王、またの名をエドモン・ダンテス。無辜の人民、マルセイユの船乗りに過ぎなかった彼は、無実の罪により獄に繋がれ、十四年の時を経て脱獄、モンテ・クリスト伯と名を変え、復讐を成した。最終的には復讐を止め、異国の寵姫エデと共に旅立ったが、復讐者のサーヴァントである彼は事情が異なる。傍らにエデは無く、復讐鬼モンテ・クリスト伯爵としての側面を切り出された彼は、その在り方として『孤独』であると言えよう。

以上三名を私は『三人の王』として召集した。彼らは必然的に、何かしらの『孤独』を抱えた存在であるからだ。

質問その二。ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリイに挑戦状を叩きつけたのは何故か？

それは『彼女でなければならなかったから』だ。今回の議題に応えるべきは、歴代のサンタクローズの中でも最も『実在から遠い』存在である彼女だ。

ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリイ。聖女ジャンヌ・ダルクの『オルタナティブ反転』、自らを魔女と認めたフランスに憎悪したという『空想』

から生じた復讐者、その幼少期アウエンジャーに、サンタクロースとしての側面を与えた存在。空想より生まれ、実在から遥かに遠ざかった彼女は、まさに奇跡めいた存在だと言えるだろう。

サンタアイランドとは何か？

意味深に仮面を被り、正体を隠す『師匠』とは何者だ？

そもそも聖女ジャンヌの幼少期とは何なのか？

一つ一つ、疑問を紐解けば見えてくることだ。それらは聖夜の幻想、うたかたの夢に過ぎぬ。それ故に『実在と空想の狭間の存在』であるサンタクロースの概念と、相性は良好であったのであろう。故にこそ、今回の件においては彼女である必要があった、というワケだ。そして最後の質問。私がこの騒動を起こしたきっかけとは何だったか？

……私がサーヴァントとして召喚され、特異点を形成するに至った経緯にまで遡る。

私が最初に、召喚された時にいた場所はこの部屋ではなく、また外に見える雪降る村でもない。ただ『私』という存在が認識できるだけの、何もない闇の中だ。闇の中に一際輝く何かを見出すまで、感覚的には五分とかわらなかつたがね。私とその『輝くモノ』に意識を向けた時、周囲の景色は一変した……闇は消え、辺りは私の出身地を模した、雪降る村となっていた。勿論、この石塔も存在していた。私の意のままに存在する固有結界として、私は塔の最上層に座すことにした。

『聖杯』と言うのだったな。人理が不安定になっている状態で発生した、微弱な魔力の流れ。それがやがてカタチを成し、私という存在を核として特異点なるモノを生み出すに至った。私の宝具、即ちは固有結界という形で具象化された、非常に微弱な特異点だ。人理そのものに影響を及ぼすほどの規模は無い。

そして此処が『特異点』として存在する以上、特異点を観測する者がある。人理継続保障機関カルデア。君達だ。

私は聖杯を通して君達を観測した。いわば聖杯をアンカーとして、カルデアとこの特異点を繋げたと言ってもいい。

観測した、といつても、まあせいぜいが映画機プロジエクターのように一部分のみを映し出す程度のものだ。そう規模の大きい話でもない。

生憎、こちらは特に使命を負ったわけでもなかったのですね。暫くはコレで暇でも潰そうかと思っていた。

そして私の目に映ったのは、君達が近日中に開催しようとしている、クリスマスパーティー用の飾り付けを行っている場面だった。微笑ましいものだ。

ふと、私は考えた。クリスマスに現れる存在。願いを叶え、奇跡を起こす『人間』である者、即ちサンタクロースのことだ。

古来より奇跡とは神の領分だ。自然の恵みより始まり、人の心に希望を齎す奇跡。それを人の身に行う者達の伝説が、一つの巨大な宗教を作り上げたように、一寸先も見えぬ未来に灯火を光らせるほどの精神的効果を成し得るのだ。

宗教とは信仰だ。不安を募らせる未来に『救済を齎す者』を仮定し、信ずる者に安寧や幸福を約束する。救済者に未来における己の幸福を依存し、委託する。大雑把に言えばこういう話だ。

『良い子にしていないと、サンタクロースは来てくれない』と諭されたことは無いかね。そういうことだ。サンタクロースとて、根幹にあるモノは同じと考えたワケだ。

神は死んだ。いや、神は死ななければならなかったのだ。

奇跡によって救済を齎す超越者。死後に魂の幸福を約束する神。それらは人の世においてはさして重要なものではなく、また人間自らの価値を損なってしまうものだ。人間にそんなものは必要ない。彼らは在るがままで美しい。

人は己を救済出来る。超常の救済者に頼らずとも、己の意志で己を救済出来るのだ。故にこそ私は問わねばならぬ。

サンタクロース、その存在を。奇跡齎す神の名残、彼こそ、私が相対し戦うに相応しい。



「以上だ」

淡々と、しかしこれまでになく情感を込めて、フリードリヒ・ニー

チエは語り終えた。

「なるほどねえ。聖杯を使ってカルデアと接続していたからこそ、嬢ちゃんに手紙を送り付けることも、『三人の王』を従えることも出来たワケだ」

「然り。彼らは聖杯によって新たに召喚したサーヴァントではなく、カルデアから招いた者達だ。そして……聖杯はここにある」

ニーチェが虚空に手を翳すと、朧げに光を放ちながら、金色の杯が姿を現す。膨大な魔力の塊、特異点の核たる聖杯が、ニーチェの手に握られている。

聖杯をそつと机の上に置き、ニーチェは立香に視線を向ける。

「カルデアのマスター。私は以前、君に『答えを抱き、ここに来るがいい』と言ったが……君の中に、答えはあるかね？」

声色は穏やかだが真に迫る何かを孕んでいた。外的な感情の発露、その片鱗を立香は感じ取った。

立香はその上で、首を横に振った。彼女は未だ、この騒動の中に何かを見出すことは出来ていなかった。

「そうか。まあ無理もない。結論はこの後でも構わぬ。だが……貴様は別だ、当代のサンタクロース」

ナポレオンに視線が向く。その眼差しは戦意に満ちている。僅かな瞬間に、彼の存在感は物理的な重圧を錯覚させるまでに増大していた。常人であれば発狂は免れ得ない、重苦しい感情を湛えた視線だった。

「貴様こそは、私が求めた大敵。王なる者、願いに応える皇帝、そして神の名残たる奇跡<sup>サンタクロース</sup>を宿す人間よ。何故に貴様は、その道を選んだ」

ナポレオンは絶大な重圧にも負けず、己の抱く答えを語る。

「オレは確かに、願いに応える英雄だ。だがこの姿になったのはオレ自身の意志だ。誰が求めたワケでもなく、オレ自らがそうすべきと判断した。誰が願うでもなく、オレ自身がだ。けどな、サンタクロースの役割は、大それた奇跡をやらかすことじゃあないのさ。それはな、誰かの孤独に寄り添うことだ。人間は独りでは生き辛いモンだ。心の中に、共に立つ誰かを、或いは窮状を救う何かを願う。未来はどう

しようもなく闇の中で、多くの人間はその中で今を生きる。だからこそ、だ」

「ナポレオンは剣を抜き、切っ先で天を指す。

「オレに出来るのは、夜空に輝く星のように、闇を照らす光として在ることだ。それがオレにとって『誰かの孤独に寄り添う』ってことななさ」

ニーチェは無言で聞き入っていた。それは『敵』として向き合ったナポレオンに対する、彼なりの敬意でもあった。

そしてナポレオンが語り終えた後、彼は静かに言った。

「そうか。それがサンタクローズか」

真正面から己と対峙したこの男は、己と完全に主義を逆とする者だ。

ならば最後に交わすのは、表層に溢れ出る言葉程度では足りない。

立香は瞬時に強烈な重圧を感じ取った。それまでに感じていた、粘質で重苦しいものではない。荒れ狂う暴風の如く、前に進む足を止める強大な力。激しく熱を持つ鋼鉄の壁めいたプレッシャーが、目の前に立つ男……フリードリヒ・ニーチェから発せられているのを察した。

「皇帝陛下……！」

「おう、感じるぜ。何て重圧だ、コレが人間の出せる力なのか？」

ニーチェは確たる信念を持って、これより完全な『敵』となる。

あまりにも力強い意志を、二人は肌で感じ取っていた。

最上層の内部は、その姿を全く異なるものに変えた。無数の星が瞬く夜空……いや、違う。空ではない。立香の立つ床にすら、星の光が瞬いている。

宇宙だ。この世界は宇宙そのものを模している。

更にはニーチェの姿までもが変化する。肌も、衣服も、髪の毛一本に至るまで完全な白一色に染まり、ただ目だけが暗黒を湛えている。ブラックホールめいた黒い眼に、白色の恒星じみた白い瞳が現れる。全身から滲み出る、炎のように揺らめく何かは、恐るべき力の奔流、即ち彼自ら発する、絶大な意志の力を、オーラめいて纏っているのだ。

「聖杯に依るものではない。これは私自らの力だ。世界に生き、世界を変える人の力。奇跡に依らずして世界を塗り変える、意志の力だ」  
ニーチェの声が幾重ものエコーを伴い響き渡る。クレバスの底から響き渡るような、低く重苦しい声が、立香達の耳に突き刺さる。

「これで最後だ。行こう、ナポレオン！」

「ああ……最後の大事な事だ！ ついて来な、マスター！」

ナポレオンが剣を構え、立香が後ろに退がった。

「では、最後の議論を始めるとしよう。当代のサンタクロース、ナポレオン・ボナパルト。全霊を賭して、私はお前を振り伏せ、粉碎する。奇跡を夢に還し、夜明けと共に消えるがいい。だが……或いは、その刃が私を超えて行くと言うのなら——」

孤高の裁定者とサンタクロース。

最後の闘いを告げる鐘が鳴る。

「その力を、可能性を、見せてみる！」  
つづく。

## 聖夜の星、曙光の夢

星の煌めく宇宙と化した、無限に広がる戦場。一步踏み間違えれば足を取られそうな錯覚を覚えつつ、後方に控える立香はしつかと足を踏み締める。

先手はナポレオンが取った。たとえいかなる摩訶不思議の力を使うにせよ、戦闘経験ではかつては軍人でもあったナポレオンが先を行く。一瞬で間合いを詰め、聖剣を振り抜くが――。

ガシリ、と奇妙な音を立てて刃が止まった。いや、止まったのではない。

止められた。逆袈裟に斬り上げる刃を、ニーチェは左腕だけで止めていた。

「バカな!」

「文人が直接戦闘において遅れを取る、という認識は改めた方が良い」力を振り絞って強引に刃を動かそうとするが、抑えつける力が逆方向から掛けられ微動だにしない。完全に無防備となったナポレオンの顔面に、ニーチェは右の拳を喰らわせる。

「ぐおッ!」

「剣を手放せ。さもなくばもう一撃入れるまで」

言うが早いか鉄拳が飛ぶ……が、ナポレオンはすかさず姿勢を落として回避する。低姿勢のまま跳躍し、剣を放棄して距離を離す。ニーチェは掴んだ剣を前方に投げ捨て、腰を落として構える。

「(なんて威力だ、アレが哲人の拳か? ……いや、そんな生易しいモノじゃねえ。コイツは――)」

「ナポレオン、後ろ!」

「ッ!」

考えを巡らせる時間も取らせず、ニーチェが背後から貫手で胸を刺しにかかる。ナポレオンは至近距離でニーチェの顔面に肘を突き出す。目の前で姿が掻き消え、次の瞬間には無防備な脇腹に蹴りを叩き込まれていた。肋にヒビが入るような感覚を覚え、ナポレオンは立香の遙か後方に吹き飛ばされる。



僅かな時間で気配すら悟らせずに背後に回るほどの敏捷性。

闘争に生きた英霊達に匹敵しかねないほどの徒手空拳の威力。

それらは哲学者として名高いニーチェからは想像し得ない、恐るべき肉体的暴力である。

……立香とてただ指を咥えるばかりではない。彼女はナポレオンが圧倒される様を観察し、過去の記憶に類例を探していた。古今東西様々のサーヴァントと契約した彼女は、サーヴァントの特性についてもある程度理解があった。

「フリードリヒ・ニーチェ……文化人かつ戦闘面では強力なサーヴァントは……」

——該当者が多すぎる。文化人・芸術家の英霊は、生前及び後世における評価や逸話により、戦闘において強力なサーヴァントになるパターンがある。条件を絞らなければなるまい。

立香は後方に吹き飛んだナポレオンに、念話でメッセージを送る。「(どれほど強力な英霊でも、弱点はある。いや……強力であるからこそ弱点に強く縛られる。もう少し練ってみるから、作戦が閃くまで持ち堪えてほしい)」

無茶ではあった。だが、令呪という最大のパワーソースを失い、一度しか使えないであろう三つの術式マスタースキルを効果的に運用し、確実に勝利するためには、何がしかの戦術を練らなければならない。

立香の案にナポレオンは、ただ一言のみを返す。

「(D' accord!)」

返事を受け、立香は風の如く突き進むナポレオンを見遣り、その目に二人の戦いを映す。

ニーチェの体捌きは防御と反撃に特化している。斬撃は手で払う、或いは身体を揺らして避け、打撃は捌め取って無効化、もしくはは逆位相の力をぶつけ、隙を生じさせて反撃に繋ぐ。おそらく単純に接近戦を挑んでは、セイバーの霊基を得たナポレオンであっても勝てはしない。宝具があれば別だが、おいそれと使うわけにもいかない。

幸いにもニーチェは、立香ではなくナポレオンとの対話たがひを優先しているため、今のところは立香を狙う気配が無い。

立香はニーチェが『いかなる英霊であつたか』を、これまでの対話から探っていた。

——その属性は『神秘の否定』。ヒトの時代を拓く者。

ジャンヌ・リリイや『三人の王』を、彼は自らの宝具や何らかの術技によって縛り付けた。ヒトの精神を定義し、神秘たるモノをただの物理現象にまで零落させる、冷徹な視線を持つ存在。

——その力は『体技』。肉体を使い、外界と交わる者。

霊基の変質があつたとはいえ、聖杯戦争において最優と称されるセイバークラスとなつたナポレオンを、正面から圧倒する体術。さらにその力の奔流と思いきオーラは、空間を歪ませるほどに強く彼を包んでいる。

——その精神は『超人』。ヒトでありながらヒトを超えた、精神力の怪物。

理論の完結を以て完成とせず、死してなおその先へ臨む鋼の精神。不変にして不滅、時が止まったが如くその在り方は揺らがない。そして、自らと意見を異にする者とは、議論を交わすことを一切恐れず、躊躇もしない。他者の精神であろうと、彼は容赦なく踏み入るだろう。情報整理は済んだ。そして……立香の脳裏に一つの可能性が過ぎる。

『超人』。他者と隔絶し、現生人類の域を超越してみせた精神力の怪物。同様に苛烈かつ強力極まる精神性を持つ英霊を、立香は知っている。

『三人の王』最後の一人、アヴェンジャー・巖窟王。

彼はシャトー・デイフに無実の罪で繋がれ、この世の地獄とすら思われた苦境と、牢獄に縛りつけた者達への憎悪により、凄まじい精神力を手に入れた。英霊として昇華された彼は、その強靱な精神を肉体に転写することで、瞬間移動に匹敵する速度の高速機動を可能としている。

ニーチェの身体能力も、あるいはその類のものか。

宝具と身体能力、どちらも精神力を要とするのであれば……こちらが精神力で上回るか、あるいは要を突き崩すか。

「(攻略法はなんとなく掴めてきた……私も動かないとね)」

立香は術式の一つ『応急処置』を、疲弊しつつあるナポレオンに使い、前方で戦い続ける二人ではなく、その先を見据えて一気に駆け出す。

必勝を期するためには、彼女の助けが必要だ。



剣と拳が激突し衝撃波を生む。一瞬の静寂を縫って駆け出した立香を、ナポレオンとニーチェはしかと見ていた。

「(マスター<sup>メル</sup>は何かを見つけたってコトか。ここが正念場か?)……なあ、ルーラー! いや、フリードリヒ・ニーチェ! アンタはこの騒動の果てに何を望んでいる?」

「突然どうした。私が望む物を聞いて、何になると?」

「いやなに、今のオレはサンタクロースだからな。アンタが求める物は、即ちオレにとって届けるべきクリスマスプレゼントだ。それが何なのかくらいは聞いておきたいのさ」

ニーチェは一瞬間を置いて、こう言った。

「神の名残の廃滅……と言えば、満足かね」

「神の名残、ねえ……クリスマスがそんなに嫌いか?」

「愚問だな。人間の存在を曇らせるのが信仰だ。あるがままで美しいモノに、飾りは必要ない。まして神や救世主を主体とするなど、私にとってみれば言語道断だ。死した神に祈る意味は無く、よって人間はより純粹に、個々人として己の価値を自覚できる精神的土壌がある筈だ。だというのに彼らは——」

「自分達の価値を理解しない、か?」

「……」

ニーチェは口ごもった。己の言おうとした言葉の先を読まれたからだ。

ナポレオンは続ける。

「人の可能性は、もっと開かれてあるべきだろう。人生の全てを賭けて何かを成し遂げるのも、何も為さずに終わるのも人間だ。人間の弱さを許容する……要するに弱いヤツが弱いまま生きられる世界。そ

れも人間だ、と許せる世界をこそ、オレ達は求める必要があったのさ」  
ニーチェは鉄拳をナポレオンの顔面に叩き込んだ。ナポレオンの長身が吹き飛び、距離が離れる。

「その弱き者達にこそ、貴様は滅ぼされたのだ。都合の良い救世主で在り続けた者の末路だ。所詮貴様は、他者の操り人形でしかない。どれだけ励もうと貴様は救われぬ。人はより強くなり、先に進めるのだ。自己の救済を架空に委託する思想、都合の良い救世主など、最早人間には必要ない」

ニーチェは淡々と語る。だが、彼の語調には熱が込められていた。理解されぬ孤独と、人類への歪な信頼がないまぜとなった言葉。

確かに人は成長出来る。強く在れるし、強く在りたいと願うのも必然だ。

だが、誰もが強くなれるわけではなく、それ故に人は願う。

『何でもいい、誰か私を助けてくれ』と。

弱い人間の祈り。闇の中で弱々しくうずくまり、自分独りではどうしようもない問題の解決を、自分ではないナニカに委託する。

都合の良い祈りで、都合の良い救世主だ。

だとしても——その祈りに応えようとしたのが、彼だったのだ。

ナポレオンは立ち上がり、踏み込みと共に剣を突き出す。

「都合の良い救世主で結構さ！ それでも、闇に惑う誰かを救える！ 闇を照らす星の光になれる！ 朝焼けと共に消えるとしても、夜空に輝く星として、誰かが迎える曙光を夢見られるのさ！ 夜空を駆け回る星々に誓い、可能性の橋を懸ける！ 強きも弱きも、何一つ否定しねえ！ 全てを呑み込み、受け入れて進む……それがオレのサンタ道だッ！」

聖剣が、最も新しき伝説の剣が光を纏う。突き出された光の刃を、ニーチェは掴んだ。刃が再び払いのけられる——かと思われた。

光が炸裂し、両者の視界を白く焼いた。ニーチェとナポレオンが飛び退き、距離が離れる。

視界が晴れる。ナポレオンは己が手に持つ聖剣を見て仰天した。

刃が、装飾が、ひび割れている。聖剣に走った亀裂は、虹色の光を

放っていた。

ナポレオンは聖剣を天に向けて突き上げる。亀裂は更に増え、剣は完全に崩壊した。無数の破片となって砕け散る、聖剣ジュウユーズの贗作<sup>レプリカ</sup>。しかしその無数の破片は、一つ一つを光と成して、徐々にナポレオンの掌に収束していく。やがて一つの光の塊となったソレをナポレオンは右手で握った。

黄金の柄と、四つの鈴を携える十字の形をした鏢が、ナポレオンの手に握られる。左手を添えて振り下ろすと、白く光を放つ両刃の刀身が形成され、ナポレオンの腰に様々な宝石を散りばめた鞘が現れた。更にナポレオンの頭には、三つの鈴が付けられた王冠が被せられる。

ナポレオン伝説に曰く『フランス王家に伝わる宝剣・ジュウユーズは、フランス革命の際に本物が失われている。ナポレオン・ボナパルトは自身の戴冠式に備え、ジュウユーズのレプリカを作らせた』という。

真偽は不明だ。だが英霊ナポレオンが、無数の人々が紡いだ伝説、即ち可能性の光を受け止め、伝説の通りに振る舞うのなら……ジュウユーズの名を冠したこの贗作の剣もまた、伝説を再現したとして不思議ではない。

「随分と待たせちまったらしいが……あえて言おう」

即ち、サンタクロス皇帝ナポレオン・ボナパルトの戴冠である。新たな装いとなったナポレオンは、王冠と剣に取り付けられた鈴を鳴らして宣言する。

難しい言葉はいらない。ただ一言だけを、彼は告げる。

「オレが……ここに……いるぜー」

大宇宙を模した空間が捻れ始めた。無数に瞬く星の光は、その輝きを一つに束ねようと、ナポレオンが持つ聖剣に集う。剣と王冠、合わせて七つの鈴が鳴り始める。

その様を見たニーチェが、今までにない驚愕の表情を見せた、次の瞬間。

永劫回帰の牢獄が、誰も知らぬ形へと塗り替えられた。



一体何が。立香は強烈な発光と、鈴の音色を背に感じながら叫んだ。

そして次の瞬間には、立香達がいた空間は白く光に包まれ……これまでとは全く異なる姿に変わっていた。

辺り一面に聳えるは、鐘楼と煙突を備えた無数の家々。吹き荒ぶ風が鐘を鳴らし、雪降る夜の街に、かすかな賑わいを与えていた。

蔽かに低く音を立てて、鐘と風の音が響き渡る。住居の形式は様々で、ヨーロッパ系の住居によく見られる石造りの家や、木製の柱が目立つ和風の屋敷をはじめとした、多種多様の住居が並び立っている。

立香が立っていたのは、武家屋敷めいた建造物の上、瓦葺きの屋根の上だった。

慎重に周囲を見回すと、虚ろな視線を空に向ける少女の姿が、目前にあった。

ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリイ。謎めいた空間の展開と共に、何処かへと姿を隠されていたらしき彼女は、立香の目の前に座り込んでいた。

「リリイ！ 無事だった……ってワケでもないか……とにかく聞いて！」

立香が大声で呼びかける。何が起こったかは不明だが、ここでジャンヌ・リリイの意識を呼び覚ますことができれば、好機がこちらに転がり込んでくることは間違いない。

「新しいサンタクロース……ナポレオンが、最後の大事な事に向かってるんだ！ 一緒に行こう！ 手伝ってあげないと！」

返事はない。虚ろな目に光は灯らない。しかし立香が諦めることはない。

「待ちに待ったクリスマスだよ！ 一年に一度しかない……いや、一生に一度しかないクリスマスなんだッ！ だから……サンタクロースがいないと始まらないでしょ？」

今日は十二月二十四日、即ちクリスマス・イヴである。聖夜を駆けるサンタクロースがいなければ、クリスマスは始められない。立香は

二代目サンタクロースに、熱烈に語り続けた。

サンタの魂に火がついたか、ジャンヌ・リリーの目に僅かな輝きを取り戻される。

「行こう、ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリー！ 私達の……カルデアのクリスマスはここからだッ！」

最後の一押しは、激しく燃えるような情熱を込めて。

言葉の全ては、彼ら聖者達が今宵行う、一夜の献身に込めるが如く。

「……あ……うあ……れ？ ……トナカイ、さん？」

「……リリイッ！」

「トナカイさん……トナカイさん！」

果たして立香の声は、ジャンヌ・リリーに届いたのだ。

意識を取り戻したジャンヌ・リリーは、恐ろしい悪夢を見た子供のようになり、涙を流して立香に飛び付いた。力強い抱擁に、立香もあつたけの力を込めて応える。

ひとしきり抱き合った後、立香とジャンヌ・リリーは立ち上がる。

「状況を教えてもらえますか、トナカイさん？」

「移動しながら説明するよ。とりあえず……アレを見てもらえる？」

立香が指差した先には、二人の男が屋根を飛び移りながら、拳と刃を交わす光景があつた。



雪降る夜の街と化した世界は、風が吹き鐘が鳴る音を除けば、寝静まったように静かだ。月光が夜を照らし、街は次の朝焼けを待っている。

ナポレオンとニーチェが向かい合っているのは、金色の鐘楼を備えた教会の頂上だった。大きな満月を背にして、ナポレオンはニーチェより高い位置に陣取り、語りかける。

「この固有結界を作り上げるのは、術者だけじゃあない。中に入った者の心象を映し出す。巖窟王エドモンがそう言っていた。もしソレが真実であるのなら……新たに塗り替えられ、出現したこの世界は誰のモノだろうか？」

「……私ではあるまい。これほどに広く開けた世界は、私一人によつ

て作り出されるモノではない。貴様か、ナポレオン・ボナパルト」  
「……さてな。まあとにかく、だ。続けようぜ、まだ足りないだろ？」  
ナポレオンはニーチェに切っ先を向ける。白く輝く刃は、月光を浴びてその輝きを増したように見えた。

「当然だな。この程度で、議論の決着とするわけにはいかぬ。いかな姿へと変わったとて、モノの本質が変わらぬのならば、我が全霊を以て打ち砕くまで」

固く拳を構えるニーチェ。静謐だが強烈な闘志が、彼の全身から滲み出る。

高度の差は約三メートル、その距離を一瞬で詰めたのは、先に大跳躍からの飛び蹴りを放ったニーチェだった。ナポレオンも剣を突き出し、互いの得物を激突させる。

衝突が生んだ衝撃が、離れた場所の鐘を鳴らす。開戦を告げる号砲の如く、重苦しくも激しい音が響き渡った。

始まりの一撃、競り勝ったのはナポレオンだった。ニーチェは回転しながら遠方に吹き飛び、その勢いを利用して、離れた民家の屋根に着地する。

「(先程までとは明らかに違う。霊基が整ったか、急ごしらえのハリボテではないな)」

冷静かつ手短かに、ニーチェはナポレオンの変化を分析する。追撃を仕掛けると、ナポレオンが上空から迫る。流星の如き急降下突きを、ニーチェは左腕で逸らし、左脚の回し蹴りを叩き込む。ナポレオンは向かい側に立つ屋敷のバルコニーに叩きつけられるも、すぐに態勢を立て直して反撃の機を窺う。

剣を杖に立ち上がったナポレオンは、その場で剣を横一文字に振るう。すると、残光が光の刃となって前方に飛んでいった。飛来する光刃を、ニーチェは体を反らして避ける。

両者が視線を交える。最早言葉を交わす段階は過ぎた。並行線のイデオロギーを交わらせるには、体が二つあればいい。

二人の男は月下を飛び回る。  
幾度も拳と刃を交え、己の魂をぶつけ合う。





「あれがナポレオンさんですね。靈基に変化があったみたいですけど……」

「何が起こったかはわからない。ただ、うっすらと魔力の流れが変わったような感じがあるんだ。令呪は全部使っちゃったから、少し確度は落ちるけどね」

藤丸立香はジャンヌ・リリイに抱えられ、家々を飛び跳ねながら進む。

サーヴァントの動体視力で、遠方のニーチェとナポレオンを確認したジャンヌ・リリイは、一旦路上に降りて立ち止まる。小さな体軀ではあるが、その肉体は常人を遙かに上回るサーヴァントのものだ。人間を抱えて跳躍する程度は容易くこなす。

立香を地面に下ろすと、ジャンヌ・リリイが口を開く。

「さて、二人がかり……いや、三人がかりでというのも少々卑怯には思えますが、あの人には我々三人で応じなければいけませんね」

「……そうだね。コレが最後の勝負。サンタクローズとして、責務を果たす時だ。ナポレオンと合流したら、うまくこっちに引き付けてくれる？ 令呪は無いけど、術式は二つ残ってるから、タイミングを凶って援護するよ」

「わかりました！ それじゃあ……行ってきますね、トナカイ<sup>マスター</sup>さん。サンタクローズの先輩として、後輩を助けてあげないと！」

そう言って、ジャンヌ・リリイは決戦の地へと走り出す。彼女の小さな背中が、立香にとって、今は何より頼もしく見えた。



「オラアッ！」

「ふんッ！」

激烈な攻勢を見せるナポレオンと、それを防ぐニーチェ。息をつかせぬ激戦は、果てる気配もなく続く。夜明けにはまだ程遠い。

この決闘に余人の入る余地は無い。阿吽の呼吸めいて拳と剣が代わる代わるに繰り出され、双方の体には一つとして傷はない。

ナポレオンは徐々に、ニーチェの殴打が正確さを増してきているこ

とに気付いた。拳の威力は以前より低くなつたが、明らかに挙動を讀んでいると思しき局面が度々発生している。

他者を映し出す鏡たる固有結界の所有者たるニーチェは、この戦闘において、ナポレオンをその全身で『観察』していた。先程の宇宙的空間がニーチェの心象であるなら、それが解かれたということは即ち、固有結界の主導権を手放したということ。しかし同時に、彼はこの空間を通してナポレオンを観察することが出来る、という意味でもある。

食べぬ男だ、とナポレオンは心中で笑う。そして、突き出される拳に合わせるように剣を振り下ろした。

しかしながら、芸術めいた呼応の技巧は、間を破った横槍によって唐突に終わりを迎える。

がっぷり四つに組み合つた二人を狙つて、一本の槍が飛んできたのだ。

「何だッ!? ……いや、この槍は!」

「何たる……よもや自力で這い上がった、か……ッ!?」

あわや直撃か、と思われたその槍は、僅か十センチの距離を残して、石造りの屋根に突き刺さつた。

槍に結ばれた、赤と緑が彩る帯がたなびく。

「自力だけではありません! サンタにはとても心強い仲間がいるのです!」

何処からか声が響く。幼い声のする方角へ、二人が目を向けた。

そこには、誰あろうジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリイが、月を後ろに腕を組んで立っていた。その隣には、彼女達のマスターたる藤丸立香が立つ。

「サンタの嬢ちゃん! ああ、いや……今は二代目サンタ先輩、か!」  
「そうですとも! カルデアの二代目サンタクロースが、新米サンタを助けに来ましたよ!」

『二代目サンタ先輩』。その事実を誇るように、ジャンヌ・リリイは後輩に応えた。

「さて……はじめましてですね、ニーチェさん。いや、厳密には三日く

らい一緒にいたワケですが、私は貴方に人質に取られ、眠らされていたので、ほぼ初対面みたいなものでしょう。早速ですが、お説教の間です！」

「説教とな、幼き聖処女よ。正しく聖者である者が、今更私に何を語る？」

「簡単なコトですよ。ナポレオンさんとマスタートナカイさんが今までやってきたことと同じです。孤独を癒し、誰かに寄り添う奇跡。それは戦いにおいて『結束』という形で現れるのです！ 今からそれを見せてあげます！ ついて来てくださいね、ナポレオンさん！」

「ハッ、上等！ そっちの方こそ遅れるなよ！ 夜明けまでには終わらせるぜ！」

槍を拾ったジャンヌ・リリイが、ナポレオンと並び立った。

「俺が先に行く！ 援護頼むぜ、先輩！」

ナポレオンが先んじて仕掛ける。ニーチェがこれに応じ、斬撃を的確に捌いていく。

防勢にあつてはニーチェの有利。もはやナポレオンの剣技がニーチェに届くことはない。彼は完全にナポレオンの一挙一動を予測可能な域に到達していた。

「やはりダメか。もう俺の剣が通用しない、となると……そろそろ本格的にカードを全て切つていかねえとな」

叩きつけるような一撃を放ち、ナポレオンは一旦距離を離れた。入れ替わるようにジャンヌ・リリイが突撃し、ニーチェと交戦する。

「ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリイ……何故お前はここに現れた？ 囚われたままであれば良からうものを」

「何をバカな事を言いますかッ！ 今日<sup>サンタ</sup>は十二月二十四日、クリスマス・イヴですよ！ 即ちサンタクローズがその役割を果たす日！ 私サンタが何もしないなんて、それこそ言語道断です！ 職務怠慢ですよ！」

ジャンヌ・リリイの決意は固い。サンタクローズという役割を背負った彼女が、この日クリスマス・イヴを何事もなく過すなど、誰が許すとも彼女が許すまい。怒声と共に槍を突き出し、ニーチェの防御を強引に破る。

突き、薙ぎ、払い、叩きつける。凄まじい速度の攻勢は、強靱な精神力によつて編まれたニーチェの肉体に確かな傷を入れていた。

「……明らかに強化されている。マスターの力ではない。私が弱くなったにしても力の差が歴然とし過ぎている。よもや……」

ニーチェは思考の果てに一つの可能性に至った。それは彼が思い描いた『最上の結末』だが、同時に彼の想定外でもあった。

叶わぬと断じていた理想の実現を、己が今、目の当たりにしようとしている。心中で彼は驚きつつも、僅かな高揚を覚えていた。ジャンヌ・リリイが放った光弾を弾きながら、次に来る斬撃に備える。

「引つかかりましたね！」

「何？」

「ぜえりやあッ！」

続く一撃は突き出される白刃、防御姿勢を誤ったニーチェは後方に吹き飛んだ。ジャンヌ・リリイがフェイントを入れ、ナポレオンが追撃を担ったのだ。

「まだまだあッ！」

「これで、どうですか！」

更なる連撃は舞うが如く。ナポレオンが斬り進み、隙間を縫うようにジャンヌ・リリイが槍を突き入れる。二方向から不規則に、しかし正確に襲いかかる斬撃を完全に弾くことはニーチェには不可能であった。

ニーチェは乱撃の中でタイミングを掴み、反撃の拳をナポレオンに叩き込むが、拳が触れる直前、ナポレオンの姿が掻き消えた。

『緊急回避』！

「Merci, Ma・trea！」

ナポレオンは立香の術式によつて、転移に等しい速度で上方へ跳躍していた。

上空より降る一撃は、真正面を狙う唐竹割り。ニーチェにこれを選ける選択は無かった。手を顔面の前で交差させ、辛うじて防御の態勢を取るが、聖剣の斬閃が防御諸共叩き斬る。

刃に付いた血を払うように残心を極め、ナポレオンはよろけながら

後退したニーチェを静かに見据える。

もはや満身創痍。容易く立ってはいられまい。だが奇妙なことにニーチェは、立ったまま全身を震わせている。それは敗北への恐怖ではなく、今までにない喜悦に由来するものであった。

ニーチェは、笑っていたのだ。彼が初めて見せた笑顔だった。

「私はどうやら……見誤っていたらしいな」

ニーチェが口を開く。厳かで低い声に、僅かながら喜びが混じっていた。

「この世界を形造つたのは、ナポレオン……お前だけではなかった。ジャンヌ・リリイ、そしてカルデアのマスター。お前達三人が、私の想像も及ばぬ、新たな可能性を發揮したということか」

「えっ、私も?」

立香は事態が上手く呑み込めておらず、困惑した。

「そうだと。鈴の音は夜に響き、聖者を呼ぶ。そして遍く世界に一時の幸を顕すがために、サンタクローズがあるのなら……この雑多極まる街こそは、人の生きる世界の縮図か。実に滑稽、だが私には成し得ざる領域だ。だからこそ——面白い」

そう言つてニーチェは再び拳を構える。未だ果てぬ闘志はただ、人間の可能性を信じるが故に。今まで以上に力を漲らせ、巨壁の如く立ちはだかる。

「来るがいい、夜の聖者よ。その全霊を私に見せてくれ。私を越えて往くと言うのなら、力を示せ。私を超える、人の力を」

迫力に気圧されそうになりながらも、立香は彼の態度に、ようやく一つの解を見出す。

それは『何故フリードリヒ・ニーチェは裁定者ルーラーなのか?』という疑問に対する答えでもあり、そして立香の彼に対する理解でもあった。であれば、事ここに至つて、立香に出来ることは一つだけだった。ただ、『カルデアのマスター』として、眼前の相手に向き合うこと。その方法は至極単純だ。

「二人とも、準備はいい?」

「勿論です。真のサンタ道、見せてあげます!」

「オレも全力を出させて貰おう。フリードリヒ・ニーチエ、アンタがそれを望むなら……オレが、いや、オレ達が！ 叶えてやろうじゃねえか！」

王冠の鈴が鳴ると共に、遙か上空から星の如く何某かが降り来たる。

黒と金の鉄騎、夜空を掛ける鋼の戦車<sup>ソリ</sup>。

かつて第一層・アルテラサンタとの戦いでナポレオンが使い、甚大なダメージを受けて放棄された第一宝具、『ドゥ・レットワール聖夜を高らかに告げる虹輪』は、以前と変わらぬ姿でナポレオンの下に帰参したのである。武骨極まるデザインは健在だった。

「マスター、最後の術式……『瞬間強化』はオレに使ってくれ。とびきりの一発をブチ込んでみせるさ」

「分かった。リリイは発動までの援護を頼める？」

「それは勿論——言われるまでもなく、です！」

言うが早いか、ジャンヌ・リリイが駆け出す。槍と共に回転しながら、ニーチエの懐に飛びかかる。

槍の一撃を受けたのは、ニーチエが繰り出す左脚の横蹴り。槍の穂先が足裏に突き刺さることはなく、衝撃を生んでジャンヌ・リリイの動きを止めた。

左脚を下ろし、軸足として大跳躍からの踵落としを決めにかかるが、これはジャンヌ・リリイが袈裟斬りに弾いた。

ナポレオンと立香はニーチエ達の戦いを見据え、最後の一撃に備える。

孤独なる一人の男へ送る、感謝と別れの歌。

戦いを通して語り合った者よ。次があるならば、その時は友として。

二人は馬車に乗り込み、空の彼方へと走る。

ニーチエは二人を追うことはしなかった。己が正面から、彼らの全霊を受け止めなければならぬと確信していたからだ。

ジャンヌ・リリイは二人を信じて見送った。そして彼女に出来ることは、彼女自ら秘する策が発動するまでの時間を稼ぐことであった。

ニーチェの拳が飛ぶ。僅かな動きでこれ避け、カウンターの蹴りを見舞う。これを耐えたニーチェは、逆の拳で次の一撃を入れにかか  
るが、

「レフトハンド……」

「何？」

「リトル克蘭チッ！」

ジャンヌ・リリイは動きを見切り、クロスカウンターめいてニー  
チェの胸に魔力弾を叩き込んだ。見事なまでのクリティカル・ヒット  
に、ニーチェの瘦身が紙飛行機のように吹き飛んだ。

本来は両手で放つものを、片手に収束させて放ったのだ。ジャン  
ヌ・リリイの左腕も無事ではなかった。だが、残る右手で槍を持ち、天  
の光に祈るように掲げてみせる。

「聖なる夜……ステキでムテキなキセキの一瞬！」

聖処女ジャンヌ・ダルクは、神の声を聞き、百年戦争においてフラ  
ンス軍に多大なる勝利を齎した。神の御業、あるいは奇跡と称された  
活躍だ。

しかしここに立つ彼女が成す奇跡は、大いなる神の御業ではない。

『小さな子供』として彼女が願う、トウインクル・リトルスター小さな星のような奇跡。

『優雅に歌え、かの聖誕を』！

無数の贈り物が、雨の如く降り注ぐ。

ニーチェはそれら全てを払いのけて進むが、プレゼントの雨が止ん  
だ瞬間、彼は何を思っただ空を見上げた。

虹色の七星が、輝いていた。



空を駆けるソリの中で、立香はナポレオンに問われた。

「マスターメイトル、一つ聞いてもいいか？」

「どうかした？」

「……ニーチェが言ってた『答え』。アレは得られたか？」

最初に塔の最上層で会った時、そして再び相見えた時にも、立香は  
ニーチェに『答え』を問われていた。

そもそも、答えとは何であったか。如何なる『問い』に対する『答

え』であるのか。戦いの中で立香は、己が出すべき一つの返答を見出しつつあった。

ニーチェが人類を裁定する者であるのなら、今を生きる人間たる立香が、最後の答えを出すしかない。

立香は少し間を置いて、ナポレオンに返す。

「大丈夫。本当に正しい答えじゃあないかもしれない……でも、『今の私』に出せる答えは決まったから」

ナポレオンはその言葉を聞き、右手でサムズアップを返した。

「未熟でもいい。間違つても構わない。ただ答えを探すことだけは……歩み続けることだけは諦めない。そんなオマエだからこそ、オレ達は信じて背を預けられた。マスター、いや……藤丸立香！ 今こそ信頼の証を立てるぜ、最後まで付き合ってくれよ！」

ナポレオンが聖剣を備え付けの鍵穴に差し込む。二頭の鉄騎はその姿を二輪の機構へと変じ、横倒しになった六つの車輪が虹色に輝き始めた。カーナビゲーション機器を操作すると、ナポレオンは鍵穴から聖剣を抜いた。

「マスター、少しの間運転は任せるぜ！」

「……待って、私、免許持っていないよ!？」

「自動操縦オートマに設定してあるからな、問題は無え！」

言うが早いか、車体から飛び出してその上にナポレオンが立つ。立香が空座の運転席に座り、攻撃に備える。

「一夜一時の奇跡を此処に……我らは星空に虹を架ける！」

聖剣を前方に突き出すと、七色の光が横に並ぶ。それらは空中で鈴を象り、凜々と夜空に音色を響かせる。

数多に広がるその色は、一つの世界に無数の可能性を許容する在り方。

等しく道は開かれている。等しく未知は閉ざされている。

故にこそ、人類史の英霊たる彼は、道なき道往く者達の礎として、未だ見ぬ未来の可能性を示すのだ。

人一人が選ぶ道は一つだが、それらは全て違う色だ。決して交わることはない。それでも『共に歩む』ことを選べるといふ可能性こそ、孤



高にして強靱であることを最強の在り方とした裁定者へと叩きつけるに相応しいモノであろう。

「夜に鳴り響く七色の鈴よ、希望を示し未来を灯せ！」

ただの贗作に過ぎなかつた剣は、伝説と交わり人類史に新たな聖剣として刻まれる。たとえそれが一夜限りの幻であつたとしても、誰かが覚えている限り、鈴の音は再び鳴るだろう。鈴の音に込められた願いは、闇に惑う者たちの孤独を癒す小さな奇跡。あるいは、遍く夜を照らす、無数の星々。

鈴を鳴らせ。未だ見えぬ、遙かな道の果てまで。

夜の風に吹かれて、七つの鈴が鳴り渡る。

安らぎと希望の歌、聖剣に新たな銘を刻む。

「『未来を示せ、遍く空を駆ける七色の星歌』！」



ニーチェは空を見上げた。果つること無き無辺の宇宙<sup>ソラ</sup>を。

視界に留め置けぬほどに広がる夜空の星は、見える限りの全てが輝いていた。

一際強く輝く星が七つ。その七星が、彗星の如く七色の尾を引き、天から地へと降り立たんとしていた。

「アレは……何だ？ 私知らぬ光、私とは相容れぬ可能性。人類がいずれ辿り着くであろう、宇宙へ漕ぎ出す未来の先に待つ七星……即ち——」

遙かな宇宙へ漕ぎ出す未来、その夢を見せる光条。それは北天に七つ輝く恒星の名を、新たに冠した。

天枢<sup>ドゥーベ</sup>・天璇<sup>メラク</sup>・天璣<sup>フェクダ</sup>・天權<sup>メクレズ</sup>・玉衡<sup>アリオト</sup>・開陽<sup>ミザル</sup>・摇光<sup>アルカイド</sup>。

それら七つを束ねたる、大熊の尾。またの名を——

「北斗七星か……！」

果たして偶然か、必然か。北斗七星は欧米圏にあつては荷車に喩えられることがある。Grand<sup>グランド</sup>Chariot<sup>シャリオ</sup>とは、フランス語における北斗七星の呼称であつた。

『大戦車』。それはまさに、現在ニーチェに向かつてきている、虹の極光纏うナポレオンの戦車である。

「もう一度いきまますよ、覚悟はいいですね！」

『優雅に歌え、かの聖誕を』ツ！」

上空から再び、プレゼントの雨が降る。先程よりも勢いは弱く、ニーチェは容易く片手で払い除ける、が……その瞬間にニーチェは察した。

「破れかぶれではないな……！ 本命は、上か！」

次の瞬間、七つの光が彼の総身を撃ち抜く。一瞬にして全身を灼かれ倒れ臥すも、最後の力で立ち上がり、天より降る八つ目の光を見た。ナポレオンが剣を突き出したまま、戦車と共に突撃してきたのだ。

大質量の奇跡が眼前に迫る。受ければ命は無いだらう。それでもニーチェが取る行動はただ一つ。

「待たせたな！ オレが来たぜ！」

「来るがいい、サンタクローズ！」

激突。

虹色の光となって駆ける戦車に向けて、ニーチェは右拳を突き出していた。衝撃が彼の身を文字通りに削っていく。続けて左拳をぶつける。両の手を交互に打ちつけ、壮絶な迫合いが始まった。

意地の張り合いだ。拳を乱打する超人と、光となって突き抜けんとする聖者。片方は満身創痍でありながら、その力は拮抗していた。最後に残った心が、超人の力を純粹の域に導き、無限に高みへと進み続ける。削ぎ落とされた果てに無窮となり、彼は個の生命、個の存在として唯一無二にいらんとしていた。輪郭すらおぼろげだ。このまま極まり続ければ、やがては世界から弾き出された完成者となるだろう。

だが、彼らだけは絶対にそれを許さない。

超人が人である限り、孤高ゆえの孤独を癒す奇跡を為す。

遍く孤独に安らぎと癒しを。彼らの名はサンタクローズ。

「今だマスター！」

『瞬間強化』！ 頼んだよ陛下ア！」

祈りと共に、最後の術式が発動する。力比べの決着は、より強き力によって果たされる。周囲に散乱したプレゼントが、光となってナポ

レオンに宿った。先達の後押しだ。

互いの一撃が交錯する。ニーチェの右拳が、大戦車の車体に届こうとしていた。しかし。

「貫けッ!!」

全ての力を注ぎ込んだ限界機動。かつて勝利砲と呼ばれたその戦車は、形を失い一筋の光となった。虹を噴いてニーチェの胴体に突き刺さり、空へと昇る。光を散らして進む流星が、ついには遙か彼方へと飛翔し、爆散した。一つの爆光は七つに分かれ、虹色の北斗七星を象る。

地上に取り残されたジャンヌ・リリイは、祈るように七星を見上げていた。やがて光が消えると、彼女は空を走る何かを見た。

空を走る戦車だった。二頭の鉄騎が曳く大きな戦車が、空から雪に包まれた地上へ降り立った。右側の鉄騎が、鎧に男を載せていた。

ジャンヌ・リリイは目を輝かせた。彼らは夜空に散ったのではない。生きて帰ってきたのだ。

凱旋は鈴の音と共に。己のマスターたる藤丸立香と、当代のサンタクローズ、ナポレオン・ボナパルトをジャンヌ・リリイは笑顔で迎え入れた。

「おかえりなさい、トナカイさんマスター!」

「ただいま、サンタクローズさん」

「オイオイ、今回のサンタはオレだろ? ……見てみる、二人とも。空が……いや、世界が明けるぜ」

三人が東の空を眺める。太陽が昇るように、夜の世界が白く明けていく。

それはこの星の何よりも明るい、夜明けのような光だった。



気がつくくと、藤丸立香は雪原に立っていた。二人のサンタクローズ・サーヴァント、ナポレオン・ボナパルトとジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリイも一緒だ。

彼らは再び、石塔の前に立っていた。一つだけ違うのは、石塔が崩壊し瓦礫の山を作っていた点だった。

そして、瓦礫の山の頂点には、孤独な裁定者フリードリヒ・ニーチェが座っている。彼は立香達には背を向けたまま、遠くの空を眺めている。

状況をおぼろげながら理解した三人は、ニーチェの背を見据える。孤独な背中だった。人の世にありながら、世の理を飛び越えてしまった男。神の死を語ることで神を否定しながらも、神の存在を肯定していた者。

一線を画す思想というのは、理解しうる他者なしにはその実在を証明するのが難しい。彼は旧きに在りて、早すぎたのだ。地球という大きな揺り籠に揺られるままの人類では、彼の志向した世界の実現は不可能に近い。やがて星を巡る日々が訪れたとして、それまでに人類はより良い方法を見つけるかもしれない。

そうなつては、彼は真の意味で孤独となるだろう。彼が希望を見出した人類が、彼の業績を忘却してしまうのだ。

ナポレオンが無言で立香の背中を押した。彼女が見出した『答え』を、ニーチェに贈る時が来た。立香はそれを察し、瓦礫の山を登り始めた。

「ニーチェ……フリードリヒ・ニーチェー！」

彼女は彼の名を叫んだ。忘れ物を届けに来たぞ、と言わんばかりに声を張る。ニーチェはゆっくりと立ち上がり、彼女の方に向き直る。

「……答えは、得られたかね」

「まだ完全じゃあないですけどね」

「聞かせたまえ。私は、聞かねばならない。私に勝利した、君の答えを」

積まれた瓦礫の頂点から、ニーチェは立香を睥睨していた。

立香の全身に、僅かな震えが見受けられた。おそらくは、恐怖している。あるいは、懊悩している。もしくは、逡巡している。未だ迷いの見える姿だった。

大きく深呼吸して、立香はニーチェに答えを言った。

「私は……貴方も抱えて行きます。貴方を、一人で置いていくことは、私には出来ない。だから、貴方との思い出を超えて、私は先に進みま

す」

その答えを聞いて、ニーチェは微かに笑みを浮かべる。

「独りでは、難しかろう?」

何かを期待するように、ニーチェは反論した。

「私一人では難しくても……仲間と一緒になら、いつだって」

「そうか……安心したよ。君は……いや、君達は、私の理想を越えて行ったのだな」

白貌が、満面に笑みを浮かべていた。

これは、彼にとつても勝利だったのだ。

彼が宿した一つの灯火は、時代を経て立香に宿った。その事実こそが、彼の実存を証明し続ける。立香がニーチェを、忘れない限り。

かつて在った火を継いで歩き続ける旅人。人類最後のマスター藤丸立香は、フリードリヒ・ニーチェという英霊との絆を、戦いの果てに結んだ。

無数の輝きをその目で見届けた立香は、ニーチェを輝きの一つとして、抱えて行くと誓ってみせた。それが、今を生きる己に出来る、古き超人への敬意の示し方だと、彼女は考えた。

そしてこれは、この騒動を通して得た、彼女なりの答えなのだ。

アルテラサンタには『教導』を、ギルガメツシュには『愉楽』を、エドモン・ダンテス巖窟王には『復讐』を、ナポレオンは与えてみせた。

教え導く喜びも、闘争の愉悦も、復讐の達成も、つまるところはサントクロースとしてのナポレオンなりの『孤独を癒す奇跡』なのであれば。

フリードリヒ・ニーチェにとつての『孤独を癒す奇跡』とは何だったのか?

その答えとは『藤丸立香が、フリードリヒ・ニーチェを記憶する』ことではないか。彼女はそう解釈した。

次があるならば、朋輩としてもう一度語り合おう。だから今日の思い出を、私はきつと忘れない。この思い出を抱えて、私は貴方を超えて行こう。

不器用で不恰好な、立香なりのメツセージだった。

古き者は安堵の表情を浮かべたまま、立香に語りかける。霊基が限界を迎え、徐々に彼の体は消滅しつつあった。

「一つ、老人の昔語りと思つて聞いてくれ。私は……聖者にはなりたくなかった。あれほど哀しい生き物は無い、私はそう思っていた。死してその名を神聖視され、別の何かと誤認されたままに讃えられ続ける。私にはそれが堪え難かった。目の前にある現実は、それだけで価値あるものだ、私は信じていたのだ。だが……どうも私は、少し特殊であつたらしい。私を解しうる者は、永く現れなかつた。それでも私は信じ続けた。人が宿す可能性を、超人の域に至る未来を。英霊の座に召し上げられてなお、信じ続けた結果がコレだ。私は、自らに宿った炎を纏い、裁定者の霊基を得た。おかしな話だろうか？ 私を英霊と称し、超人の体現として讃えた者がいるということだ。私自身が望んだわけでもないのに、な……」

ニーチェは己の内にあるものを全て吐き出すように、饒舌に語り続けた。その身体は消えかかっていたが、彼はまだ足りないと思はれ、舌を滑らせる。

「故に、滅多なことでは私は召喚には応じないことにしている。まあ好んで私を呼ぶ物好きもそうはいないがね。だが……君がもし、万が一にも、私の助けを求めるとするならば……いや、やめておこう。長く余計なことを喋り過ぎたな。時間も無くなってきたので、最後くらいは手短かに済ませるか……未だ弱き勝利者よ、君の名前を聞かせてほしい。その名こそが、私の勝利であり、そして君達からのクリスマスプレゼントとなるだろう」

立香はそこで気づいた。そういえばまだ名乗ってなかつた、と。

一つ咳払いして、彼女はニーチェの目を見つめ、己の名を名乗った。

「それじゃあ——はじめまして、私の名前は……藤丸立香です！」

微笑みと共に彼女は名乗り上げる。今ここで消えるニーチェは、次の召喚があつたとしても彼女を覚えてはいないだろう。

だとしても、今はこの出会いを、笑顔で迎えたかつた。

「フジマル・リツカ、か。不思議な響きだな。では……リツカ、君の前途には、多くの試練が待ち受けるだろう。それでも私は、君が未来を

生きてくれることを、今この場で祈らせてもらおう。それと、最後に一つ。私と立ち会った、サンタクローズ達に贈る言葉といえば……コレしかあるまい」

光となって消え去る寸前、彼は明日を先取って、『お決まりの文句』を告げる。

「Frohe Weihnachten!」

その言葉を残し、孤独にして孤高たる裁定者、フリードリヒ・ニーチエは去っていった。

静寂が訪れる。祭りの後は静けさが残るのみ。

立香はダ・ヴィンチと通信を行い、帰還の準備を始めていた。長いようで短かった、激闘のクリスマス・イヴが幕を閉じようとしている。「オレ達も帰るとしよう。この特異点自体がヤツの結界だとするなら、もうじき崩壊が始まるだろうからな」

「そうですね。それに、明日までにプレゼントを配らないといけませんよ、ナポレオンさん!」

帰還の光に包まれながら、ナポレオンは『明日』に思いを馳せる。それは『明日』が祭日であるから以上に……彼こそが、今回のサンタクローズであるからだ。

「そうだな。今のオレはサンタクローズで——明日は、十二月の二十五日だからな!」

エピローグへ、つづく。

## エピローグ：1844年クリスマスの旅

冬の寒さが深まる頃の話だった。と言っても、この場所は年中豪雪に見舞われているので季節感などあったものではないが。

今日は十二月二十五日。現在時刻は午前六時。

南極の山嶺に存在する、人理継続保障機関フィニス・カルデアの施設は、何事もなくクリスマスを迎えていた。

カルデアに所属するマスター藤丸立香ふじまるりつかは、二人のサーヴァントと共に管制室へ到着した。

「ただいまあゝ……」

「おかえり。そしてお疲れ様だね、立香ちゃん」

出迎えたのはカルデア現局長代理にして魔術師キャスターのサーヴァントであるレオナルド・ダ・ヴィンチであった。

「それにしても、まさか本当に全員分配とは思わなかったよ。サンタクローズってのは凄いな……」

「おうよ。オレ達三人で、キツチリ全員分配ったぜ！」

「分担作業と言えど、結構なハードワークでしたね！」

返事したのは立香の傍らにいる二人のサーヴァントだ。

一人はカルデアの二代目サンタクローズにして槍兵ランスのサーヴァント、ジャンヌ・ダルク・オルタ・サンタ・リリイ。

もう一人は……当代のサンタクローズ、弓兵改め剣騎セイバー・ナポレオン・ボナパルト。

三人は今しがた、カルデア所属スタッフ及びサーヴァント全員に、クリスマスプレゼントを配達し終えたところであった。

全員に、である。



遡ること六時間前。

日付が変わるその時に、立香達三人は一八四四年・ライプツィヒの特異点より帰還した。

時間帯が深夜だったために、スタッフは大半が就寝しており、使用電力も通常の半分程度であったが、ダ・ヴィンチの全面協力を得てど



うにか帰還には成功した……のだが。

『では今から、クリスマスプレゼントを全員分配達しよう』

と、ナポレオンが言い出した。

曰く『誰にも知られず、誰もがプレゼントを得る。迅速に、気前よく行こうぜ』とのこと。ナポレオンが重視したのは『知られないこと』の方だった。特異点の主であったフリードリヒ・ニーチエと戦う中で、『サンタクロースとして自分がどう振る舞うべきか』を彼なりに考えた結果であるらしい。

強引だが、筋は通っている。立香はそう考えた。

セイバー・サンタクロースとして新たな霊基を得たナポレオンの宝具『シャルル・ドゥ・ノエル・ドゥ・レットワール聖夜を高らかに告げる虹輪』を用いてプレゼントボックスを生成し、その場に居合わせたダ・ヴィンチが開封した。中身は画材セットだった。個人的な趣味に用いるとはダ・ヴィンチの弁だが、実態が不明だった『プレゼントの中身は貰った当人次第』というナポレオン本人の言葉の真偽はこれでハッキリしたことになる。

そういうわけで、立香達三人はこの戦車……もといソリを利用してカルデア施設内を走り回ることになった。

走行時の騒音を抑えるために速度を落とし、ソリの内部で生成したプレゼントボックスは砲塔から射出せずに、各スタッフ及びサーヴァントの部屋の前に手作業で置いた。

カルデアの施設は広大であり、そこに暮らす人員は非常に多い。予想以上に時間がかかり、全員分届け終わる頃には六時間が経過していた。

こうして彼らは、今年のサンタクロースとしての仕事を、殆ど誰にも知られることなく成し遂げたのである。



「大変だったろうね、ご苦労様。ところで……聖杯なんだけれども」「回収出来なかった、だろう?」

「まあね。今回は少し特殊なケースだったのもあるけども」

今回の特異点を形成していた聖杯は、ニーチエの固有結界を維持するのに用いられていた。しかし、この聖杯の力は特異点の源としては

非常に微弱なものであったが故に、放置していてもいずれは消滅したのではないか、というのがダ・ヴィンチの見解であった。

実際、立香達が帰還したのとほぼ同時に、管制室は特異点の消滅を確認している。聖杯の行方は不明だが、聖杯が特異点とニーチェを維持していたように、ニーチェもまた聖杯を繋ぎ止めていたと考えられる。片方が消滅すれば、もう一方が消えるのも時間の問題であった。

とはいえ、ニーチェが聖杯をアンカーとしてカルデアと一時的に接続したり、カルデアから三騎のサーヴァントが拉致されたのも事実である。紛うことなき異常事態を解決したというわけで、決して無駄足だったわけではないだろう。

管制室での用事はもう無い。しかし立香には気がかりなことがあると一つあった。

「ところで、もう準備は出来た？」

「もちろん。開催は午後六時を予定してるから、それまではゆっくり休んでくれたまえ」

「ありがとう」

それだけを聞いて、立香達三人は管制室を出ていった。



つい先程まで走り回っていた、カルデアの施設を歩き回る立香達。ナポレオンとジャンヌ・リリイは、立香を彼女の自室へと送ってから、今日のパーティーに備えることにした。立香が単独ではないのはそのためだった。

「待ちたまえ、ミス藤丸」

背後からの声を聞き、立香が顔を向ける。視線の先にいたのは、黒いインバネスを着込んだ痩身の男。右手にはパイプを持っている。

彼の名はシャーロック・ホームズ。故あってカルデアに協力している、裁定者のサーヴァントにして、イギリス文学史にその名を刻む世界最高峰の私立探偵だ。

ホームズは立香を呼び止めると、歩み寄って小さな封筒を渡した。

「今回はサンタクロースとして夜を徹して働いていたそうだね。その点についてはご苦労。そんな君に私からささやかなプレゼントだ」

「……これは？」

「君が管制室を出て行った後に、ダ・ヴィンチがコレを発見してね。たまたま居合わせた私が配達を依頼されたわけだ」

立香は封筒の封を切った。中から覗くのは小さな手紙だ。紙面の色は黄金に染まつており、電灯の光を反射してきらめいている。

「この事件は、手紙から始まった。ならば手紙で終わるのが一つの落とし所だろうか？ まあ送り主がそこまで考えていたかは私には見当がつかないが……手紙というのは読まれてこそ意味を発揮するものだ。読んでみては如何かな？」

ホームズはにこやかに笑い、立香達を追い越して去っていった。

「マスター、コイツは……」

「まさか……聖杯が回収できなかったのは……」

立香達は一つの可能性に思い至った。特異点の核となっていた聖杯は、このために使われたのではないか、という答えに。

「なるほど……それは……回収できなかったわけですね……」

「まあ、あの特異点自体は、人類史にとつちや小規模な歪みだったらしいしな。手紙として届けるくらいが限度だったのかもしれない。マスター、この手紙はお前さんに宛てられたものだ。まずは一人で読んでみて……後でどんな内容だったのか教えてくれ！」

ナポレオンとジャンヌ・リリイが去っていく。気づけばもうそこは、立香の自室の前だった。

立香は扉を開き、ベッドに座る。数日分の疲れが一気に襲い掛かるような錯覚に襲われる。このまま目を瞑れば、眠れそうだった。

部屋の電灯を点け、封筒から手紙を取り出す。思った以上に中身が小さい。

何が書かれているやら、と不安になってはみたものの……手紙にはやけに達筆なアルファベットで、たった一文が添えられていただけであった。差出人の名前は無い。

「……過剰なくらいに、律儀なヒトだ」

手紙の文面を頭の中で反芻しながら、立香は眠りについた。



「メリークリスマス！ この時期になると僕の曲も何曲か聞こえてくるものだけど、今年は君が弾いてくれるとはね。なかなか感慨深いよサリエリ」

「リズムが狂う……首を落とされたくなくば立ち去ることだアマデウス……」

「まさか立ち去ると思うかい？ 何せあの宮廷音楽家アントニオ・サリエリのピアノノ生演奏だぜ。クリスマスなんだしミサ曲の一つや二つはやるものだと思っただが、いざ見に来てみれば『きらきら星』を弾いてるときた。なかなか興味深い絵面だよコレはアハハハ」

「王妃の提案は無碍には出来ぬ。それに我の……私の腕を買ったとあっては、最大限の結果を見せるというのが顧客への礼というものだ。このためにわざわざピアノを用意させたのだからな」

「この時期になると注文が増えるな。面倒極まりないが、この手の祭日のしわ寄せはサービス業に来るといっ好例でもある。来年からはもう少し計画的に……」

「私を呼んだか、厨房のアーチャー」

「……三代目サンタか？ 生憎と君を呼んだ覚えは……いや、一つ考えがある。デリバリーを頼みたいのだが」

「フオッフオッフオッフ。三十分以内に何処へでも届けてやろう」

「フハハハハハ！ 褒美だ、受け取るがいい！」

「珍しいねえ。あの金ピカ英雄王が、スタッフにご褒美なんざ」

「何を言う。主役は遅れて登場するもの、祭事とは全力で当たるもの。まして年次の節目とあらば、労いの言葉と褒賞オレを与え、次の年の労働の励みとする。王としての領分であれば、我が弁オレえるは当然のことよ」

「……オタク、実はサンタになれなかったコト、根に持ってないです？」

「ケーキの摂取カロリーはやや過剰ではないかと思いますが、細かい点を指摘し続けるというのは、ことこの日に限っては無粋というものでしょう」

「……ほう、鉄血の婦長にそこまで言わしめるとはな」

「何か勘違いをしているようですが、私はこういった祭日は嫌いではありません。健やかなる日常の延長に祭りがあるならば、そこに込められる祈りとは健常たる生活の継続ですから」

「祈り、とは。随分なロマンティストだな、メルセデス」

「祈りではなく誓約です。そして私はメルセデスではありません」

十二月二十五日、午後七時。

人理継続保証機関カルデアは、クリスマスパーティーの真つ最中であった。

今年のクリスマスパーティーは、様々な催し物を開くサーヴァントが大勢いた。ピアノの生演奏や演劇のように平和なものから、総合格闘技の大会といった激しいものまで、様々なイベントが多種多様にパーティーを彩っていた。

混沌と言えばまさに混沌であるが、各々が好き放題にコトを運んだ結果、妙な調和が生まれていた。ある意味では、今年の『芸風』でもあったのかもしれないと、某探偵は後に語る。

藤丸立香は窓辺に座り、喧騒から離れて一時の休息を取っていた。傍らにはショートケーキが載った紙皿が置かれている。

行く年、来る年。年末の祭日であるクリスマスは、同時に来るべき次の年が幸せであるようにと願う意味合いも持つ。

来年もまた、良き年であるように……と祈っても、人理が不安定な現在ではそれも大した意味は持たないのではないか。そんなことを考えて、立香は少しアンニユイになりつつあった。

「ようマスター<sup>メル</sup>、楽しんでるかい？」

そこに現れたのは、平時の服装に戻ったナポレオンであった。着崩した軍服や葉巻は、彼が弓<sup>アーチャー</sup>兵の頃から持ち込んでいたものである。そして現在、彼の霊基は紛うことなきアーチャーであった。

「サンタ衣装はどうしたの？」

「ああ、アレか。今回のサンタは確かにオレだが、だからと言ってソイツを大っぴらにする必要もあるまいよ。それにサンタの仕事つてのは、プレゼントを届けることだ。年に一度の仕事を終えたら、オレのサンタ業は次のクリスマスまで休業さ」

「私は反対したんですけどね。せつかくですし、もつと派手にやっても良かったのでは？」

ナポレオンの背後からひよつこりと顔を出したのはジャンヌ・リイだ。クリスマス当日を迎えたからか、彼女の足取りはいつもより軽やかだ。

突然現れた二人に毒気を抜かれてか、立香は別の話題を思い出した。懐から封筒を取り出し、ナポレオン達に見せる。

「そうだ！ 手紙の内容なんだけど……読む？」

「そういえば、何て書いてあつたんでしようね？」

「どれどれ……『勝者たる君の行く道に、灯火のあらん事を』か。律儀なモンだ、な……いや待て、何か不自然だな。手紙自体が小さいからコレで良いのかもしれないが、余白が大きすぎる……まさか！」

文面を読み上げてから、ナポレオンは何かを思い立ってライターを取り出した。手紙の下段に火を当てると、独りでに炎が広がって、新たな文が現れた。

「炙り出し!？」

「凝ってるな、ヤツのやりそうな事だ。マスター、読んでみてくれ」

立香は手紙を受け取り、新しい文に目を通す。そこに書かれていたのは、送り主からの激励の続きであった。

『君が踏破した全てのものが、君を強くするだろう。故に君は運命と戦うにあたり、己というものを常に見つめなければならなくなる。襲い来る苦痛と戦い続けるのだ。それが君を破壊し尽くさない限り、君は君のまま強くなれる。私は、君という人類の未来に期待する。』

1844. 12. 25. 『

送り主の名は無い。しかしこの手紙を誰が書き、誰が送りつけたかは、立香達にとっては一目瞭然であった。

「未来に、期待する……」

「人類史そのものが艱難辛苦の積み重ねであったように、いずれお前さんもそういう道を歩く時が来るだろう。だが……死して人理の影

法師になつた英霊達は、今を生きる人間達の礎として、背中を押すことができる。そういうメツセージなのかもな。あの男も世界に召し上げられた英霊の一騎だった、つてことだろうさ」

「もちろん私達もついてますよ、マスター。トナカイさん この夜が明ければ、私達は来年に向けて新しい日々を送ります。それは人理を取り戻すため……というのが目標ですが、何より日々生きることそれ自体のためでもあります。私としては、次のクリスマスも楽しく過ごすためだったりしますけどね！ 少し早いですけど……来年もよろしくお願いしますね、マスター！」

望まれて在るサンタクロース、彼らはクリスマスという祭事の概念を背負う者たちだ。彼らが送る未来への激励は至極単純、健やかな生への祈りであつた。

『来年も、良い年でありますように』。

『来年のクリスマスも、無事に迎えられますように』。

クリスマスがある限り、サンタクロースは人々と共にある。

気づけば手紙はどこかに消えていた。先程まで手の中にあつた感覚が、全て夢であつたかのように無くなっている。

「さて……まだまだパーティは始まったばかりだ。楽しもうぜ！」

「そうだね。じゃあ、三人で色々周ってみる？」

「良いですね！」

立香達はこの奇妙な数日間を胸にしまい込んで、道行く者達に今日という日の合言葉を投げかける。

「「メリークリスマス！」」

足取りは軽やかに、サンタクロースは宴に繰り出した。



かくして役者は舞台を降りた。

頓珍漢達の騒動劇はここに幕を下ろす。

しかしながら、未だ客席に座する者が一人。  
闇に包まれた劇場の中で、異彩を放つ白い影は、未熟で不恰好なそ  
の劇に、拍手を送り続けていた。  
おわり